第 160 号
昭和62年(1987年) 1 月14日

関西大学通信
THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3-3-35

福建省泉州市の元宵節（尾崎實文学部教授提供）

中国の元宵（正月十五夜）

藤善　真澄

法輪は天上に轉じ、梵聲は天上より来たる。燈樹に千光は照ぎ、花燄は七枝に開く。月影は流水に凝り、春風は夜梅を含む、旛は黄金の地に動き、鐘は琉璃の臺に發す。

「正月十五日、通衢に燈を建て、夜に南樓へ升る」と題した隋煬帝の詩である。「春風は夜梅を含む」、万載ののちのちまで悪名をとどろかせる暴虐の天子にも、新春そして元宵を迎えた慶びはまた格別とみえ、似つかわしくない詩心をみせる。

春とは名ばかり、これから本格的な寒さが訪れる日本の正月にくらべ、中国のそれは春節に恥じぬ季節感がある。現在では旧暦の元旦（大年初一）より三日までを祝日と定めているが、昔は七草粥のルーツとみられる七日人日を祝い、十五日を中日とする灯節いわゆる上元節に至ってクライマックスを迎えた。今も、ところによっては盛大に十五日を祝うようである。道教の三元、七月十五日の中元と十月十五日の下元におうずる上元、それも宵の節であったから元宵節のほか元夕や元夜とも呼ばれ、煬帝が詠った「流水に凝れる」最初の満月のもと、目もあやな火の祭典がくりひろげられた。灯節と称するゆえんであり、趣巧をこらし珍奇をきそう灯籠が家ごとに吊るされ、また目抜き通りの官庁街、商店街の塔燈など夜空をおおいかくす張灯の波であったという。永尾龍造『支那民俗誌』、敦崇『燕京歳時記』（小野勝年訳注）ほか中国人の紹介も多いが、現在では昔の面影はない。

ところで唐睿宗の先天二年（七一三）正月、十五夜をはさむ三夕、長安は安福門外に高さ二十丈の燈輪をたて、これに錦綺をあしらい金銀でかざりつけ、五万の盞燈をともした。遠くからは花樹のように望まれた（『朝野僉載』三）、というのが最も早い、具体的な元宵張燈の資料である。しかし「千光は照く」と煬帝の詠う燈樹が物語るように、隋代でも盛大におこなわれており道教というよりは仏教色豊かな行事となっていたことが分る。なにを隠そう元宵張燈を盛大ならしめた張本人こそ煬帝にほかならないのであり、大業六年（六一〇）正月十五日、洛陽の端門街に設けられたバカでかい演芸会場に、朝貢のため訪れていた諸国の酋長や使節達を集め、一八、〇〇〇人の管弦楽と燈火・燭光による一大ページェントを、夜を徹し半月にわたってくりひろげてみせた。これが発端なのである。残念ながら小野妹子は前年すでに帰国して接待にはありつけなかったが、異国に初めての正月を迎えた高向玄理や僧旻ら留学生・学問僧は、その年から装いを新たにした絢爛豪華な夜の行楽に、ど肝を抜かれたこと請け合いである。

さても普段は厳しい夜間外出の禁がとかれ（放夜）、開け放たれた城門や坊門からは、きらびやかな車馬がくり出し、「馬上に楽を作で、以て相い誇り競う」（『大唐新語』）、街なみは往きかう観燈の客でうまり「人びと顧るを得ず」といえば、宵山の京都四条通りを彷彿させる情景である。唐代になると華麗さ奇抜さにみがきがかかり、楊貴妃の姉、韓国夫人などは、高さ二四〇メートルの百枝燈樹を山頂におったて、一斉に火をともし、五〇キロ四方をあかあかと照し出したという（『開元天宝遺事』）。その名からみて、たぶん秋田の竿燈を立体的にふくらませた造作ではなかったかと想像される。地方都市へ波及した宋代の張燈は、蘇州のものをベスト・ワンとしたが（『乾淳歳時記』）、蘇州は水の都、川面に映える燈樹のさまは、さぞかし美事な初春の風物詩であったろう。近代化にともなう復活を期待するや切である。

（文学部教授）

千里眼

古い話で些か恐縮だが、今から八十五年前の明治三十五（一九〇二）年一月二十三日から二十六日にかけて、青森歩兵第五連隊第二大隊の二百十名が八甲田連峰の麓で遭難、内百九十九名の将兵が凍死した。世に言う八甲田山雪中行軍遭難である▼この事件は、すでに二十日ばかり後の二月十六日、イタリアのミラノで発行されている『コリエーレ・デラ・セーラ』紙の日曜版に、彩色さし絵つきの記事で報道された（この絵の写真が、現在、青森市幸畑の資料館に展示されている）。事故の異常さと国際電信網の発達もさりながら、当時、極東の一小国の出来事がこれほど短時日の間にヨーロッパにもたらされたとは、現代の我々から見れば、全く意外な情報の速さである▼ところで、情報の裏には必ず、新奇なことを知りたいという好奇心、人の知らないことを知って優位に立ちたいという打算が働いている。しかし、いくばくかの情報を持っているからと言って、事の真相を探り得たと即断するのは禁物である。正しい全ての情報を集めているのでもない限り、はなから真理は語れない。にも拘らず、自分の持つ情報が全部だと錯覚してしまうのもまた凡人の通弊である▼同様のことが文学研究についても言える。扱う作品そのものよりも、作品を取り巻く状況の方を重視する傾向が依然として強い。が、どれほど周囲の事情に通暁し、それに対する意識を発達させてみても、肝腎のテキストが理解できなければ無意味である。それが外国語の原典ならなおさらだ▼周辺の知識も豊かだが、しかしテキストをしっかり読みこなせる――こういう学生を私は育てたい。

（T・Y）

盛大に学園祭

"永遠の現在を求めて"

第1部 後夜祭に1万人集う

後夜祭では学歌をはじめ、大学の歌の数々が澄みきった夜空にこだました

本年度の学園祭は、例年よりも日程が遅れて晩秋の十一月二十六日(水)～二十八日(金)までの三日間にわたって開催された。テーマは、「from CONFUSION '86」である。サブテーマは"永遠の現在を求めて"と設定された。全学統一学園祭実行委員会・常任委員会が結成されるにあたり、相当混乱したようであるが、その意図するところは、混乱した現在から永遠に通じる何かを生み出したいという願いをも含めて、テーマとサブテーマが決定されたと聞く。

全学統一学園祭が開催されるようになってから、本年度で九回目を迎えたが、本年の企画内容は、講演会・シンポジウム十一、映画・ビデオ十二、研究発表二十三、加えて中央ステージやサブステージ等の各種催しが多種多様に行われた。特に本年度は研究発表企画は半減したが、人権問題講演会をはじめとして、アカデミックな企画も随所に見られ、多数の学生諸君や一般市民等が参加した。また、本学恒例の後夜祭においては平日にも関わらず、一万名以上の学生達が集まって催された。応援団をリーダーとして次々に繰り広げる乱舞、吹奏楽部の演奏に合わせて舞うバトントワリングの各演舞のたびに万雷の拍手が湧き、学歌をはじめとする、大学歌の数々が澄みきった夜空にこだました。最後に、肩を組み合って歌う「逍遥歌」が千里山キャンパスをつつむ冷気を吹き飛ばし、大変な盛り上がりの中に名残を惜しみながらも幕を閉じた。(学生部)

お祭り広場全体が若者の熱気で一杯になった

万博公園で華やかに 第2部

今年度の第2部学園祭(天六祭)は、本学創立一〇〇周年を記念して名称も関西大学II部創立一〇〇周年記念祭と改め、十一月十六日(日)日本万国博覧会記念公園内お祭り広場、同ホールで盛大に開催された。

例年、天六学舎で行っていただけに規模も内容もすべてが大きくなり、学生実行委員会もいろいろな制約の中、様々な企画に取り組んできた。中でも各パート、クラブ、サークル、クラスが全員一致団結して実行委員会を盛り上げていった様子は、やはり創立一〇〇周年を自らの手で祝おうという意識が高いように感じられた。

また、企画も盛りだくさんで、万博ホールでは、大学関係者の挨拶のあと、吹奏楽部の演奏会、森毅京大教授、西川きよし氏の講演会、リーダークランツのコーラス、山本達彦のコンサートが、会議室では、木村洋二社会学部助教授の講演会、弁論部の討論会が、また、ロビーでは絵画、写真部の展示会がそれぞれ行われた。一方、お祭り広場では、二つのステージにわかれて応援団乱舞祭、体育会恒例の餅つき、利き酒大会、邦楽部の演奏会、軽音楽部のジョイントコンサート等さまざまな催物が行われた。加えて、そのステージを取り囲むように模擬店が並んでいるため、広場全体が若者の熱気で一杯であった。いずれの行事とも、例年とはちがった雰囲気の中で開催されただけに学生諸君や校友および一般市民も加わって大変な盛り上がりであった。

いずれにせよ、第2部学生が全員一丸となって取り組んだ創立一〇〇周年行事であっただけに、結果として多少の反省点は残るものの学生時代でしか体験することのできない一大イヴェントであったと思われる。(学生部)

研究発表も活発に 大学院祭開催さる

大学院祭は十二月四日(木)から七日(日)までの間、院生協議会の手によって盛大にくりひろげられ、院生諸君は充実した四日間を過ごした。

その間に催された行事内容は、およそ次の通り。

一　講演会　法―中義勝教授・山中敬一教授「具体的事実の錯誤について――その現代的課題」、社―内田隆三氏(神戸女学院大助教授)「身体ガジェット――脳死を通じて見る消費社会と権力」、文―野町和嘉氏(写真家)「アフリカから――地平線の彼方に見える日本」、経―吉田達雄助教授「教育の経済学から見たアメリカの教員と学生」

二　各研究科発表会　法―池田良子「ユネスコ通報処理手続」など十一件。経―岡崎昭「給付率の引き下げと医療費の動向」など二件。文―中垣晃一「十七世紀フランス哲学におけるメカニズム概念」など二件。社―深水淳一「宗教にみられる現状打破的傾向と現状維持的傾向の波動」など三件。計十八件。

三　映画上映会　「人間の約束」

なお、小春日和に恵まれた七日(日)は、第二グラウンドでソフトボール大会を楽しんだ。(学生部)

関西大学の皆さんへ

過去、本学における学費の改定は、数年間据え置き、そして学費を改定してきたため、入学年度の異なりによって学費の格差が大となり、この格差是正のためにも、昭和六十年度より毎年入学者の学費を改定する方式に変えました。

学費の改定は、学費負担者に対して負担を増大させることになりますが、国庫補助や篤志家からの寄付金に多くを期待することのできない現状では、大学の維持・充実のために、真にやむを得ないものとご理解していただきたいのです。学費納入に困難をきたす諸君のためには、従来の関大奨学金に加えて、入学時貸与奨学金や応急貸与奨学金を新設するなど、充実・拡大に努めています。

大学が、幾多ある使命の中で、社会発展の先駆的役割を果たすことをも一つの使命と認識し、現在、「国際化」、「情報化」、「開かれた大学」を教学の三本柱として推進していますが、これは、本学の伝統的な基本的教学方針の一つである、「学の実化」を現代的に具体化したものであります。これらの使命を果たすために、必要な財源の確保を図ることは、大学の設置者である学校法人関西大学に課せられた責任であります。

昭和六十二年度学部(第1部)入学者に対する学費について

高等教育を取り巻く環境が今後更に厳しくなる中で、関西大学は、教育・研究体制の強化・充実をはかるとともに、学術の学際化・国際化・情報化等に対応する諸条件の整備・充実において関西大学独自の特色を発揮することを心掛けています。

法人としては、教育・研究に必要な大学の諸計画実施に伴う経費と人件費の財源を確保すべく補助金増額への働きかけは勿論のこと、鋭意経営努力を重ねておりますが、なお財源に不足を来たすことになります。

昭和六十年度以降の学部(第1部)入学者からの学費については、すでに昭和五十九年十二月に毎年改定を行う旨を決定し発表しておりますが、昭和六十二年度学部(第1部)入学者に対する学費は、別表のとおりです。

事業計画については、昭和六十二年五月発行の『関西大学通信』に掲載しますので、参照ください。

なお、この学費は、在学者を対象とするものではないことを念のため申し添えます。

昭和六十一年十二月十七日

学校法人　関西大学

別表

○学　部(第1部)

昭和62年度の入学者の学費

学部		区分	学費(年額) 現行	学費(年額) 改定 昭和62年度入学者
第1部	法学部 文学部 経済学部 商学部 社会学部	入学金	円 260,000	円 260,000
		授業料	430,000	450,000
		維持拡充資金	100,000	120,000
		計	790,000	830,000
工学部		入学金	円 260,000	円 260,000
		授業料	690,000	720,000
		実験実習料	90,000	90,000
		維持拡充資金	140,000	170,000
		計	1,180,000	1,240,000

拳法部3年連続全日本制覇へ!

個人でも森本和伸(社4)が日本一に

本年度の体育会活動も、ウインター・スポーツを除いて、ほぼ全日程を終えた。

拳法部、自動車部が全日本大会で優勝したのを始め、本学体育会各部の健闘が随所で見受けられた。

また、本年特に顕著な傾向であったのは、下部リーグで低迷していたクラブが多数上位に進出、上部リーグ昇格を目指した試合が数多く展開されたことである。

体育会各部の念願である「カイザー関大復活」への道のりはまだ遠いと思われるものの、来年度以降へ向けての明るい材料であるといえよう。なお、主要成績は次の通りである。

拳法部＝第31回全日本学生選手権大会優勝。第2回全日本学生個人選手権大会優勝・森本和伸(社4)。第31回全関西学生選手権大会優勝。

自動車部＝全日本学生オートトライアスロン女子総合優勝。全日本学生競技大会〈三種戦・普通セダンの部〉優勝・大西圭介(工4)。全日本学生ダートトライアル選手権大会女子3位。

弓道部＝関西学生秋期リーグ戦男子優勝。

射撃部＝第33回春季全関西学生選手権大会〈SB・3P―60〉優勝・山本聖太(社4)。

自転車部＝世界サイクルサッカー・サイクルフィギュア選手権大会出場・清水将行(文3)、石井啓裕(経4)。全日本学生サイクルサッカー選手権大会2位。西日本大学対抗選手権大会〈タンデムスプリント〉優勝。関西学生サイクルサッカー選手権大会優勝。

相撲部＝第11回西日本学生個人体重別選手権大会〈70kg未満級〉優勝・佐藤直志(文4)。

漕艇部＝関西学生秋季リーグ戦〈対抗エイト〉優勝・〈ナックルフォア〉優勝。

馬術部＝第21回全関西学生大会〈選抜中障害飛越競技〉優勝・五百井寿昭(文4)。

陸上部＝第63回関西学生対校選手権大会〈30km〉優勝・尾山文明(商4)。関西学生駅伝競走大会3位。

※一部に昇格したクラブ

アメリカンフットボール部、バドミントン部。(学生部)

3年次生の父母に就職説明懇談会開く

工学部

昨年十二月七日(日)午前十時五十分から千里山学舎において、関西大学教育後援会主催の「工学部三年次生父母に対する就職説明・進路指導懇談会」が開催された。

会場では八〇〇余名の出席者が中辻就職部長、水谷工学部就職主事、森田大学院工学研究科長、谷口工学部長の順で総合的な挨拶や就職及び大学院進学等の問題についての説明が行われ、父母の方々は熱心に耳を傾けていた。

午後は十二時三十分から各学科に分かれ、学科主任、大学院専攻主任及び就職担当の教員が出席し、就職及び大学院進学について、さらに詳細な懇談が行われた。

なお、文科系学部三年次生の父母を対象にした就職説明懇談会は三月八日(日)に行われる予定である。

和紙と漆器の越前へ 外国人留学生

越前和紙製造に挑戦する外国人留学生

日本事情見学会

国際交流委員会副委員長　鳥井　克之

「第三回・外国人留学生の為の日本事情見学会」は昨年十一月二十三日(日)に観光バス二台に分乗して、八十余名の留学生と教職員が越前和紙と越前漆器の生産地である福井県武生市を訪れた。

当日朝早く北千里駅前に集合した一行は、名神高速道路を疾走し、晩秋の近江平野の田園風景を眺めながら北上して、湖北の木之本町で小休止して戦国時代の合戦場を遠望し、兵(つわもの)どもが夢のあとを偲んだ。その後、一行は中腹から醜くえぐり取られた伊吹山に別れを告げて、北陸路に入り、一路武生市を目指した。

昼食後、越前和紙会館でその歴史とその製法についての説明を受け、和紙の原料、工具、製品等の実物を見学したのち、近くにある和紙研究センターに移り、そこで参加者全員が越前和紙の製造に挑戦した。技術者の説明と指導を受けながら、手漉きの作業に入り、本物の紅葉、笹の葉、金箔、染料などをあしらって、世界に一枚しかない和紙の製作に励み、その場で各自の珍重な作品を受取った。

夕暮れ近く、越前漆器会館に赴き、漆器製造工程や製品について見聞した。すべての見学が終了したのち、秋の日の釣瓶落しの中を大阪へと急いだが、あいにくの連休のこととて、大津インターのあたりから交通渋滞に遭遇したため、北千里駅前に帰着したのは午後九時前であった。だが道中はカラオケ大会や楽しい会話で過ごし、全員に深い印象を残して、今回の日本事情見学会は無事に終了した。

先にも述べたように、この催しは今回で三回目である。第一回目は日本の代表的な伝統産業である京都の西陣織りを西陣織研究所でその製法を見学し、着物会館での着物ショーでその素晴らしい和服の「美」を鑑賞した後、滋賀県甲賀郡の信楽窯に赴き、絵付けを楽しみ、愛用の湯呑みを各自が製作した。第二回目はハイテク産業の一つであるオートメ化された自動車製造工程ラインを京都と大阪との境にある工場で見学した後、晩秋の保津川下りに興じ、紅葉の美しさに触れた。

このように伝統工芸と先端技術を隔年毎に見学するという方針なので、三回目の今回は前記の如く伝統産業を見学する次第となったのである。そこでこれまで実施した三回の見学会について、留学生にその感想や要望などを聞いてみると、次のような声が寄せられた。

学部四年間の在学中に日本の伝統産業とハイテク産業をそれぞれ二回も見学できる機会が得られることを喜んでいる。特に伝統工芸についてはその製法の一端を体験できる上に、先に述べた湯呑みや色紙のような自家特製の作品を製作して日本留学期間中の記念品にすることができるので極めて好評である。

次に見学会は観光バスで丸一日行動するので、見学地を往復する間に各地の都会や農村、自然の風景の美しさに接することができ、さらに車窓の眺めに倦きれば、同乗したクラスメート(留学生以外に留学生の友人である日本人学生や同国人も参加している)や日頃充分に話し合うことのできない教職員との会話や自己紹介を兼ねたカラオケ大会(自他共に関西大学のチョー・ヨンピルとして認められている留学生がまことに巧みに司会をしてくれている)によりヒューマン・リレーションを良くする上で、大いに役立っているとの回答があった。

このような見学会以外に、大阪市内及び周辺の半日見学会を企画できないものだろうかという要望があった。北浜の証券取引所、大阪中央郵便局、大阪府庁、大阪府警察本部、大阪中央卸売市場、大阪赤十字病院など日本の日常的な社会活動の現場を見学して見聞を広め、留学生が帰国後の社会活動に役立てたいというものである。(文学部教授)

法学部の100周年を語る

創立100周年法学部記念座談会

法学部における創立一〇〇周年記念行事の最後の催しとして、学部主催の記念座談会が、昨年十二月一日(月)、開催された。座談会には、植田重正、明石三郎、岩本慧の三名誉教授、法学部OBとして久井忠雄理事長と樫本信雄校友会会長、学部スタッフからは桜田誉、石尾芳久両教授がそれぞれ出席し、原英次教授の司会により、「法学部の一〇〇周年を語る」というテーマで話し合われた。開会に先立ち村井正学部長から「先生方のご記憶を頼りに、その時々の法学部の研究・教育等に実際に携わってこられた生々しい体験話をお伺いしたい」旨のあいさつがあり、和気あいあいのうちに回顧談が繰り広げられ、最後は、法学部第二世紀に向けての注文で締めくくられた。ここに、当日出席された先生方のお話を、一部ではあるが抜粋・要約して、お伝えすることとした。座談会の雰囲気を読みとっていただければと思う。

なお、座談会の全容は、三月上旬発行予定の『法学会誌』(関西大学法学会発行)第三十二号に掲載される。(文中敬称略)　(池田)

活発な精神的交流を

昭和一ケタ時代

樫本　昭和三年に卒業した当時、学生数は非常に少なく、商科は三人、経済科が十四、五人、法科が四十五、六人ぐらいで、一つの組が二十人そこそこ。したがって、先生もこの学生はどんな性質か、よく勉強するのか、怠け者なのかということをよくご存じだった。学生の方も、先生に対する親しみが非常に深かったと思う。雄弁会活動に熱中していた関係で、教室を抜け出そうとすると、わずか十人余りしかいないので、滝川幸辰先生などは「用事があれば行ってもいいよ」と言ってくれたが、宮本英脩先生には、よく叱られた。

在学中で忘れられないのは、大学祭で、一年生のときに宮島綱男先生の発案で第一回をやった。第二回のときには、模擬裁判をやり裁判長を務めた思い出などもある。

久井　(昭和六年に卒業した当時)千里山の学生は概ね教科書による勉強はしなかった。体育会や文化会等の部活動に青春を賭けていたといえる。とくに、体育会の強さは全国屈指のもので、関大選手の横綱を人力車に乗せて、数千の学生が心斎橋筋を提灯行列して関大のアイデンティティを歌い上げた時代だった。

ところが、夜間部・専門部の学生は、関大の法学専修の伝統を強く意識して、「司法試験に合格しなければ関大生ではない」という言葉の下で涙の出るような凄い勉強をした。

だから、1部は部活動等に、2部は法学専修というところに関大のアイデンティティを求めて、二つ相寄って関西大学を形づくっていたように思う。

昭和十、二十年代

岩本　予科が火災に遭った後の、昭和十年に予科に入り、一年目は現在の尚志館食堂の校舎(?)で、二年目に保険金三十五万円で建てられたという今の経商の第二学舎にかわった。二年目は創立五十周年記念の年で、非常に盛大な大学祭をしたが、軍事教練の厳しい時代で、大学祭でもグラウンドで兵隊ごっこのまね事や毒ガス部隊の演習をやったような記憶がある。

当時の授業は、ほとんどがノートで、末川博先生などは、教室を歩きながら「おい、ノート」と言って「物権とは…」と話しながら受講生に筆記させるという具合だった。

桜田　学部に入学した年(昭和十六年)から、(講義)期間が短縮になり、一年のときに、佐々木惣一先生の憲法を六カ月で修了した。先生は、土曜日の一時から五時までぶっ続けで講義された。宮本英脩先生はヤギひげをなでながら、いきなり「余は…」という調子の講義。末川博先生は、「おまえさんら、そらあきまへんわ」といった調子の関西弁で楽しい講義をされた。

しかし、昭和十八、九年ぐらいになると、学舎も軍に接収され、学生は学徒動員となり、講義をするということは、ほとんどなくなった。

とにかく、当時の印象としては2部の学生の気迫がとくに残っている。

教える立場から見て

植田　関大と関係を持ったのは昭和九年からで、最初の数年間は非常勤講師だった。昭和十五年に専門部の専任になった。当初は昼間(1部)だけの講義で、夜間(2部)の方は真剣に勉強する連中が多いと言うことで宮本英脩先生が続けられ、しばらくはお預けだった。当時の専門部の印象としては、法律の専攻者はせいぜい五十名足らずの少人数だったが、この中の四、五名が講義が終わっても必ずといってよいほど質問に来たことだ。ときには、五時前後まで続くこともあったと思う。それで、こちらが逆に勉強させられた。

明石　(昭和二十二年に就任した)私も初めは専門部の教授で、二十三年の新制になると同時に学部に来た形だ。あのころは騒々しい時代で、研究・教育という面では余り深い印象はない。とにかく、本学の専任の教授が非常に少ないのには驚いた。八人位だったと思う。また、当時『関西大学研究論集』というのが出ていたが、あれは全学一緒の論集で、やはり、法律は法律で出さなければいけないと感じた。

岩本　昭和二十七年に専任講師になり、そのとき(現在の)『法学論集』の第一巻第一号に私の初めての論文が載ったと思う。

司法試験について

樫本　(久井)理事長は勉強家で、司法科試験にしても、行政科試験にしても在学中に合格したという秀才だ。しかし、私は在学中はまだ弁護士になろうという気持ちはなく、卒業してから司法試験を受けるための勉強を始めた。先生も誰もいないけれど一生懸命に勉強して、昭和七年に合格させていただいた。法学部は司法試験を受けるためだけの学部ではないが、それでも一〇〇年の歴史を持つ関西大学の法学部については、世間ではやはり「関大の法科」「法科の関大」というイメージが強い。そういうイメージを守ってもらうために、法学部の先生方にもご無理をお願いし、学生諸君にも頑張ってもらいたいと思う。

久井　関西大学創立の基本理念は単なる法律教育ではなく、広い視野と社会的知性とによって裏づけられた人間教育を主眼に置いているから、別に司法試験に通らなければといった切実感は持っていない。とくに六法の化けものになるような、人間を忘れた勉強は感心しない。しかし、法学部に籍を置く以上、試験に通るのは当たり前なのに…といった残念さはある。

第二世紀に向けて

明石　(法学部の第二世紀に向けて)これからは国際化ということを考えていかなければならない。国際化に向けての開かれた大学で行かなければならないという感じがする。

久井　このたび、法学研究所の設置が教学側のご要望であると聞いている。(できれば)学際研究的なものに大きく発展させていただきたいものだ。

石尾　大正二年に専門部法律科を卒業された富永竹夫先生という弁護士の方がおられ、その方のおじさん(松藤新吉氏)が創立初期の関西法律学校の学生として、井上操の「刑事訴訟法述義」を一字一句もおろそかにしない感のあるきれいなペン字で書いたノートを、昭和三十五年に関大図書館に寄贈されている。師弟の精神的交流のあるべき姿を創立期の関西法律学校に認めることができると思う。創立当初に、教師と学生たちとの交流が活発であったことをこのノートの存在が立証していると言えよう。学生の側でこれほどきれいなノートを作っているということは、教師と学生との間に活発な質疑応答があり、そのような活発な精神的交流によって教師もまた自らの学問を深めたのだと思う。これらの伝統だけは失いたくない。私はこれだけは変わらないのではないかと思う。

(法学部教授・池田敏雄)

「エトバス・ノイエス」

創立100周年商学部記念行事の要旨

サントリー株式会社社長
大阪商工会議所会頭
佐治　敬三

商学部の関西大学創立一〇〇周年記念行事の一つとして、サントリー株式会社社長、大阪商工会議所会頭である佐治敬三氏により「エトバス・ノイエス」と題する講演会が昨年十一月十八日(火)に開催された。商学部の教職員、学生のみならず、他からの参加者も含め、多数の参集があり、好評を得た。特に、企業文化の形成と変革、なかでもとりわけ、コーポレート・アイデンティティの確立と企業家精神の問題等、示唆に富む内容であった。ここに、講演いただいたお話の概略を紹介することとした。企業のありようを新しい眼で捉えなおすにあたって、貴重な考え方が示されていて、興味深い。(羽原)

関西大学創立一〇〇周年、おめでとうございます。私の会社は親父が明治三十二年に創業し、間もなく九十年になる。同じ西区で生まれたので、身近に感じる。大阪は商人に支えられた文化。関西大学の伝統は市民の大学、官の力を借りないで、学の実化を重んじる。これは大事な視点だと思う。

私は阪大理学部化学科を戦時中に卒業し、海軍の技術将校になった。当時の会社は、松屋町筋住吉町に本社があり、また港町に主力工場があったが、どちらも空襲で焼けてしまった。昭和二十年九月に復員して、主力工場の焼け跡を見に行ったが、何も残っていなかった。ただ、幸いにも山崎のウイスキー工場は残っていて、そのおかげで今日のサントリー・ウイスキーがあり、さらには日本のウイスキーがそれを種にして残ったことになる。

論題のエトバス・ノイエスとは、英語ではsomething new、何か新しいことという意味のドイツ語である。これは、私の阪大時代の恩師の口ぐせだった。それで、自分の仕事は常にエトバス・ノイエスを求めてきた。実社会もそれを求めなければ生きて行けない訳で、社員にも言い続けてきた。

大阪は商人の町で、昔から商人の精神として、商いは牛のよだれの如しと言われてきた。これは、勤勉実直に安いもの良いものを作れば自ずと繁栄するということで、牛のよだれのように「あきない」でやれということだ。ところが現在のような激しい時代には、客にあきさせないことが大事になる。つまり現代の商業はエトバス・ノイエスでなければならない。阪大の宮本又次先生は、商売は他人の欲望を満足させることにあるとおっしゃっている。そのために必要なのは才覚であり、今日の言葉ではベンチャー、イノベーション志向であり、エトバス・ノイエスを求める心になる。

鳥井信次郎は一八九九年に寿屋を創設した。私はこの親父の二男である。名字が違うのは私が養子に行ったからで、それを聞かれたら、ヨウシ(ュ)の寿屋だからと答えている。

親父は最初薬種商に奉公し、二十歳で独立して自分の仕事を始めた。小西商店からブドウ酒を樽で分けてもらって、それをビン詰販売するという細ぼそとしたものだった。

明治四十年に、赤玉ポートワインを発売した。この名前は今でこそ古くさいが、横文字を商品名にしたのは当時の最先端を行くもので、時代のニーズを的確に捕まえたものだった。大変にハイカラ好きな親父で、ポートワインの宣伝に当時としては大胆な女優のヌード写真を使った。宣伝文句に「美味滋養」これも酒の形容詞に使うのは斬新だった。また当時としてはめずらしく新聞広告も始めた。大変宣伝好きの親父で、火事が起きると、現場に赤玉ポートワインのちょうちんを持ってかけつけたり、宣伝には天性のカンを持っていた。そのため、当時から寿屋には優秀な宣伝部員が揃っていた。

大正十二年、ワインを基盤にウイスキーを手がけることになった。今日、日本はスコットランドに匹敵する唯一のウイスキー生産国になった。しかし当時は舶来万能の時代で、日本人の心の中の非関税障壁を乗り越えるのに苦労した。ウイスキー作りはオランダ、ドイツ、スペイン、オーストラリアでも試みたが皆失敗しており、日本でするのは荒唐無稽のわざと言われた。相当リスキーなベンチャービジネスだったが、親父はそれに挑戦した。障害を乗り越えて「やってみなければわかりまへんで」「やってみなはれ」が親父の口ぐせだった。

山崎工場で生産を始めて、商品が出たのが昭和四年、サントリー白札を発売した。広告は「醒めよ人！舶来盲信の時代は去れり……」で、いかに当時のウイスキーが舶来崇拝と戦かったかを示している。

それにサントリーというネーミングの問題があった。これは社内でも賛成が多くなく、代案としてローモンドというスコッチ風の名前が多数派だった。しかし親父は、これではいつまでたっても亜流になる。アイデンティティを主張できる名前としてサントリーに決めた。名前の由来については諸説があって、鳥井の三兄弟とか、山崎工場に神社があって鳥居が三つあるからとか、鳥井サンをひっくり返したものとか言われたが、実際は、サンは赤玉の太陽からとったものである。

戦後、ウイスキーに本格参入したのは、昭和二十五年に統制解除が行われてからになる。これがトリスで、「うまい安いが看板です」のキャッチフレーズとともに、ハイボールという飲み方の啓蒙宣伝を行い、また東京と大阪にトリスバーを作り、普及に努力した。トリスは、ウイスキーそのものを日本の大衆飲料として根付かせる武器になった。当時の宣伝の傑作として、開高健が作った「人間らしくやりたいな。トリスを飲んで人間らしくやりたいな。人間なんだから」がある。これは今でも新鮮に聞こえる名コピーで、サントリーを貫く精神ともいえる。

トリスが第一次洋酒ブームとすると、第二次ブームはレッド、それを通りこしてオールド、リザーブに直結する。昭和四十五、六年頃になると、入社試験の面接で何を飲んでいるかと聞くと、オールドを飲んでいると平然と答える学生が増えてきた。いわゆる学生の分際意識が失せてきた表われで、価値観の多様化の時代がその頃から始まったといえる。サントリーもオールドだけではダメでリザーブも出していった。

ところでオールドは、日本人が日本人のために作った日本のウイスキーである。日本人は無臭民族で、香水でも淡白なものが好まれ、男性化粧品は微香性がもてはやされている。日本人は将来とも有臭民族になるとは思われない。日本人は酒の飲み方でも「うまい酒やで」と言うけれども、「いい香り」とは言わない。オールドは水割りにして、一番おいしい酒だ。

ところで、ウイスキーは戦後比較的順調に行き、しばらくは作れば売ることが可能だった。角ビンやオールドがヒット商品となって、これを武器に卸店に他商品も割り当て販売することができた。それで社内に一種の太平ムードが漂い、ここで一発、会社にカツを入れるには何か新しい仕事を、と始めたのがビールである。

キリンとは対照的な地位にあるビールをということで、クリーンでマイルドなものを捜して、最初はデンマークビールを持ってきた。しかしこれがなかなか受入れられなかった。

ただ生ビールこそビールだという信念があった。ビールの敵は熱、日光、酸素の三つだが、今までは殺菌する他の方法がなかったので、熱処理し、熱を克服できなかった。そこで宇宙開発技術を応用したろ過技術によって、生ビールを開発した。

今年で生ビールが発売二十年、ようやく大衆にも理解され、市場占拠率では六対四で生が優勢になった。間もなく殺菌ビールは姿を消すだろうし、その時にはサントリーのシェアは三十パーセントになっているだろう。そのために皆様の御声援をお願いして、私の話を終わります。

(商学部助教授・杉野幹夫)

1986年 読書アンケート

本年劈頭の紙面を賑わす特集として、「一九八六年読書アンケート」を企画した。昨年一年間に刊行された書物のうち、特に関心を寄せられたものを、必ずしも専門の領域にこだわらずに、三十三人の先生方に三冊ずつ、計九十九冊挙げていただいた。

なお、これらには若干の旧刊書が含まれているが、読者諸賢のご海容を乞いたい。

ひとの読書を知ることは楽しいもの。それは我々の知的好奇心を大いに刺激し、読書の幅を広げてくれる。味の利いた寸評の数々、どうかご一読あれ。(八亀)

=掲載は50音順=

――岩佐 代市

①小林良彰『欧米大学レポート：ハーバード大学とパリ大学』(三一書房)
②矢野暢『国際化の意味』(NHKブックス)
③岸田秀・K・D・バトラー『黒船幻想』(トレヴィル)

①は何の変哲もないタイトルだが、眼から一枚も二枚も鱗の落ちる、そんな事実の指摘が面白い。大学の「国際化」の姿がいかなるものかを知るにも参考になる。②はミメーシス・シンドロームに冒された「劇場国家」日本の、「国際化」の意味とその条件を本格的に論究したもの。つまるところ、アイデンティティの確認と異文化への共感、および歴史感覚と同時代感覚がもっとも重要、と読んだ。③は幕末の黒船に「強姦」され、開国を無理強いされた日本は、以来「分裂病」という精神的トゥローマを背負っていると説く。なるほど、アメリカ文化に対する我々のアンビバレントなスタンスとよって立つ日米関係は面白く解釈できる。(商学部助教授)

――上田 惟一

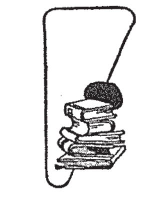
①ピーター・ラスレット『われら失いし世界』(川北稔ほか訳、三嶺書房)
②リデル・ハート『戦略論』第二改訂版(上・下巻、森沢亀鶴訳、原書房)
③佐藤誠三郎・松崎哲久『自民党政権』(中央公論社)

①ピュァリタン革命でクロムウェルの率いる鉄騎兵が国王軍を打ち破りという話なら誰でも知っていそうだが、戦った議会軍がおそらく当時では例外中の例外の大きな人間集団であったということにはなかなか思い及ばない。統計表も楽しめるイングランド社会史。②訳はあまりよくないが古典的なリデル・ハートの翻訳を。戦意高揚映画にみられるような一方の側が「怒濤の前進」を続けるという戦争はまずありえないことを改めて感じる。第二次大戦につき読まれる時は、チャーチルの『第二次大戦』とあわせ読まれることを。③政党の資料が集められているので重宝。第II部の資料解題と第III部の基礎資料が役立つ。建設族や国防族のボスもわかる。一年前には『資料日本社会党史四十年史』(社会党)が出、『自由民主党史』(自民党)もまもなく出版。(法学部教授)

――浦上 忠

①千畑一郎編『固定化生体触媒』(講談社サイエンティフィク)
②長田義仁編『プラズマ重合』(東京化学同人)
③高分子学会編『目でみる高分子』(培風館)

①は旧著の固定化酵素以来発展してきた微生物、細胞、オルガネラの固定化までに及ぶ。近年注目されているバイオテクノロジーの先端技術の一分野の発展に大いに寄与するであろう著書で、基礎から応用まで明解に記述されている。②はこの種の著書としては、確か日本ではじめて出版されたものである。プラズマ重合の技術は、これまで不可能であった多くのことを可能にしつつある。その特徴は、乾式法で高分子を合成するところにあり、化学、物理、電気・電子、金属、薬学、医学などの多分野にわたる学際領域の学問であり一読に値する。③は「分子集合のかたちと働き」と「サイボーグをめざして」との二編からなる。いずれも多くの写真が掲載されており、高分子集合体の形状と機能との関係を興味深く理解できる。(工学部助教授)



――浦西 和彦

①『日本プロレタリア文学集』全四十一巻(新日本出版社)
②紅野敏郎編『読売新聞文芸欄細目』(上・下巻、日外アソシエーツ)
③関西大学中世文学研究会編『竜谷大学図書館蔵 石山退去録』(和泉書院)

①は明治末年の大逆事件の「冬の時代」以後、大正期の労働文学を経て、昭和期におけるプロレタリア文学に至る社会主義文学の代表作・問題作を空前の規模で収録したアンソロジー。②は島村抱月、正宗白鳥、近松秋江らが登場し、自然主義文学の牙城であった「読売新聞」の明治三十四年から大正十五年末までに至る二十五年間における文芸関係作品や記事の細目である。新聞の閲覧は、資料の破損を防ぐため、国会図書館などマイクロフィルムの使用が一般化している現在において、正確な新聞細目の作製が緊急の最大課題であった。その要求に答えた最初の細目であり、近代文学研究の進展に寄与するところが大きい。③は本学国文卒業生共同による信長の石山本願寺攻めを記した稀少史料の翻刻研究。(文学部教授)

――大石 準一

①高柳健次郎『テレビ事始』(有斐閣)
②奥平康弘・環昌一・吉行淳之介『性表現の自由』(有斐閣)
③城山三郎『海外とは日本人にとって何か』(文春文庫)

系統的ではないが、本年読んだ本の中でとくに感銘を受けた三冊をあげてみた。①は大正十五年にの字を映し出すことに成功した高柳氏の自伝である。小学校三年生の時に無線通信のデモンストレーションを見て以来、電波というものに関心を持ち、科学に目を開いていくプロセスがビビッドに描かれている。②は奥平、環、吉行の三氏による鼎談と奥平氏の自説をまとめたものとに分かれている。表現の自由の問題、性関係をめぐるさまざまな議論が、単に制度かまた自然科学的な立場から論じられており考えさせられるテーマである。③は著者が世界各国を歴訪し、そこで働いている日本人の姿を紹介している。国際化が叫ばれる以前から世界のあらゆる地域に進出し、現地にとけこんで働いている日本人が存在していたことに驚く。(社会学部教授)

――奥村 透

①反町茂雄『一古書肆の思い出1』(平凡社)
②杉本秀太郎『ピサネロ 装飾論』(白水社)
③磯田光一『左翼がサヨクになるとき』(集英社)

①は、内外に隠れも無い古書業界の重鎮反町茂雄の回顧談、その上品な疾風怒涛篇。無店舗独力にて、国宝・重文を含む古典籍、天下一本の貴籍珍書を扱うこと空前絶後。稀有なことだが、天職ということに深く想いを到らしめる。反町茂雄から『弘文荘待賈古書目』を恵送され、「華客(おとくい)様」と呼ばれること—君乱心と宣うこと勿れ、叶わぬ夢のまた夢。②は、白珠のように熟成された美術批評の白眉。イコノグラフィーに対する「形態の優位」にピサネロの「装飾意志」を、カンディンスキーに時空を越えて芸術が生きつづける姿を視る。杉本秀太郎の卒業論文・修士論文はヴァレリー。『ドガに就て』(吉田健一訳・筑摩書房)を思わせる。昨年論議を呼んだということでは、③は屈指にして鮮烈。戦後四十年に茫然自失の向きには覚醒の一喝となろう。(文学部助教授)

――木村 雄二郎

①清水勲編『ビゴー日本素描集』(岩波文庫)
②山中恒『少国民はどう作られたか』(筑摩書房)
③琴秉洞・高柳俊男監修『朝鮮人の日本人観 総解説』(自由国民社)

日本人を考える。①明治中期日本の政治・風俗の風刺(漫)画。「絵で書いた日本人論」との評。

絵は一見にしかずだが、その風刺は笑いを誘うどころではない。それにしても明治の日本人、見るもの聞くものすべてが彼の画題となったようである。絵の人物に自分の姿を重ねるも一興かと。②「ボクラ少国民」六部作の著者。見事なまでの「少国民」へのこだわりに最敬礼。私も同世代。金輪際、昔はよかった、とは言わぬ。「ワタシタチモ テンノウヘイカノ オンタメニ スベテヲ ササゲル」と子供たちが、当の大人たちより真剣に誓っていた時代と教育。③解説だからと軽視は無用。凝縮されているだけに一頁ごとに身がすくむ。日本人がしてきたこととしていること、そしてこれからなにを。(経済学部教授)

――日下 恒夫

①大阪外国語大学朝鮮語研究室編『朝鮮語大辞典』(上・下巻、補一巻、角川書店)
②スターリング・シーグレーブ『宋王朝』(上・下巻、田畑光永訳、サイマル出版会)
③『昭和文学全集』第5巻(全35巻、小学館)

現金なもので、NHKハングル講座が始まった途端、お手軽「朝鮮もの」出版の有象無象が氾濫。そんな風潮とは関わりなく、手間ひまかけ、周到精緻を極めた世界最大の朝鮮語—外国語辞典①が漸く日の目を見た。中国語など一気に何十年も水をあけられたといってよい。英独仏各語はどうか。これはまさしく挑戦する辞書である。今後、朝鮮を語るときこの辞書を繙かぬものは所詮贋物。一般読者も、「*印」の箇所を眺めるだけで楽しい。②は近代中国の命運を支配した一族を中心に据えた「宋家実録」、ノンフィクションの醍醐味と歴史の英雄豪傑を等身大で眺める方法を教えてくれる。③は中高年には懐しい響きをもつ、久々の大型「文学全集」。文芸ものが文庫版で買えなくなる日に備え、貧書生は頁数と価格を研究すべし。(文学部教授)

――小谷 節男

①山本繁綽『市場開放のために』(同文館)
②P・F・ドラッカー『マネジメント・フロンティア』(上田惇生・佐々木実智男訳、ダイヤモンド社)
③レスター・C・サロー『ゼロ・サム社会 解決編』(金森久雄監訳、東洋経済新報社)

①は日本が経済成長のために、貿易面でも欧米先進国から多くの利益を引出してきた点に着目して、経済摩擦に対応するには謙虚に徹底的な市場開放を行うことが何よりも先決であると説く。政策的提言として「日本フリーゾーン構想」を展開する。それはさわやかで読みごたえがある。②は経済・人・マネジメントおよび組織の四部から成る。第一章「変貌した世界経済」は『フォーリン・アフェアーズ』誌に掲載され大きな反響を呼びおこした。③はアメリカ・ヨーロッパ・日本が抱える問題を明らかにし解決の方策を示す。分析は鋭く正確であり、提案は具体的であるから実現性が大きい。世界経済がうまく機能するには、合衆国はパートナーの協力を得て、世界貿易体制の「創造的な管理者」の役割を引受ける必要がある。(社会学部教授)

――小松 伸也

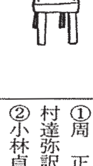
①『新素材のすべて』(「サイエンス」12月号、日経サイエンス社)
②増子昇監修『アルミニウム』(フレーベル館)
③叶内拓哉『日本の野鳥一〇〇』(②野山の鳥、新潮社)

①新素材関係の単行本はここ数年、出尽した感があるほど多数刊行されている。最新情報の概観には雑誌の特集号は見逃せない。この種の雑誌の草分け的存在で贅沢な色使いの図版が多い。材料関連の学生諸君には気楽に読めて、専門分野の位置づけに役立つと思う。②は小学校高学年程度を対象とした全10巻のシリーズの一冊である。表現はやさしいが、内容は結構充実している。金属学会でも最近小委員会で、中高生むけ啓蒙書の発刊を検討しているが、その前段階のものとして参考になった。③軽薄短小が時代の合い言葉なら文庫本こそ時代の寵児だろう。通勤通学の途中で読むにも、蔵書としてかさばらない点でも便利なものである。最近は豪華になってきてカラー写真を多く使ったものがある。これもその一冊で、野鳥観察には門外漢だが、野外に出る機会の少ない時期には、遠く思いを馳せるのも悪くない。(工学部教授)

――佐藤 万亀子

①法政大学大原社会問題研究所編『労働の人間化—人間と仕事の調和をもとめて—』(総合労働研究所)
②加藤正明・精神衛生普及会編『職場のメンタルヘルス』(保健同人社)
③松崎てる女『亀のごとく—「萬朝報」女性記者の半生—』(青峰社)

昨年の夏以来、座右の書のごとく愛読させていただいている三冊である。①と②は研究上、③は生き方にそれぞれ光明を与えていただいた。①は労働生活の質の向上の検討および展望について、以前社会学部にいらした嶺学先生が中心となって編集された労作である。②は高齢化社会の到来、OA化等の技術革新によって、職場のストレスが益々増加している今日、「職場のメンタルヘルス」を多角的視座で考えるのに必要な理論的骨子を提起された待望の書である。③は私の娘のピアノの先生のお母上にあたる著者が、若き日に駆落してまで結ばれたその御夫君が財界、政界に名を成されるまでの様々の内助の功が綴られ、実に羨しい限りの明治生まれの多才な女性の自分史である。(社会学部副手)



――坂井 昭夫

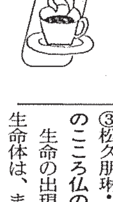
①長谷川周重『財界人からの提言・どうする日本経済』(アイペック)
②通商産業省産業政策局編『二一世紀産業社会の基本構想』(通商産業調査会)
③竹内宏・松永嘉夫編『日本経済・二一世紀へのシナリオ』(有斐閣)

日本経済の行く手には、国際化、情報化、そして高齢化という三つの「化」によって特徴づけられる未知の海が広がっている。しかも、貿易摩擦、円高不況、財政危機等の当面の困難を解決しつつ、その新世界を漕ぎ渡っていくのでなければならない。実に経済の舵取りがむずかしい時代だと言えるが、では政府や財界は果たして日本の二十一世紀の経済社会をどんなものにしようとしているのか。①は、財界首脳の本音をストレートに示すもので、類書がないだけに興味深い。②は、産業構造審議会傘下の企画小委員会の手になる報告書であり、通産政策のガイドラインとみなしうる。日本経済全般に関する解説の一例として、③の名もあげておく。(商学部教授)

――芝井 敬司

①ピーター・ラスレット『われら失いし世界』(川北稔ほか訳、三嶺書房)
②ウィリアム・モリス『ユートピアだより』(岩波文庫)
③島秀之助『プロ野球審判の眼』(岩波新書)

①は歴史人口学の方法を遺憾なく発揮して工業化以前のイギリス社会の様態に迫る好著の邦訳である。著者ラスレットは、イギリスの社会史研究をリードする「ケンブリッジ・グループ」の主導的な担い手たる研究者であり、この本を通して読者は近年のヨーロッパ歴史研究の実情を垣間見ることができるだろう。とうとう歴史研究もここまで来た。②は厳密には新刊書とは言えないが、長らく手に入りにくい状態だったので、あえて三冊の中に加えた。十九世紀の人モリスの活動は極めて多面的であるが、この一書には、彼の独特な社会主義思想が見事に表明されていて読みごたえがある。最後に、研究に疲れた精神には③などはいかが。プロ野球審判員であった著者の回想記と、ルールに関する百問百答からなっている。ただし、野球に対する想いが強すぎたり、ルールの細部にこだわりすぎると、研究を阻害すること必定であるので御注意あれ。(文学部専任講師)



――下間 頼一

①周正『崑崙の秘境探険記』(田村達弥訳、中公新書)
②小林貞作『ゴマの来た道』(岩波新書)
③「図書」編集部編『書斎の王様』(岩波新書)

①タクラマカン砂漠と青蔵高原とを界する崑崙山脈。東崑崙の最高峯ウルグ・ムスターグ峯六、九七三㍍登頂を目指す中国米国合同登山隊の探険記。茫漠たる砂漠、砂中より滾滾と清水の湧く沙子泉、壮麗な氷河、ウルグ・ムズターグ峯の雄姿。ブルーの高山湖、エメラルドの沼沢、大草原は世界でも稀な高原有蹄類や鳥類の楽園。

六字真言(オム・マ・ニ・ペ・メ・フム)や「蓮華生大師縁起」を刻した八、九世紀の石刻経文。「大脚怪」と呼ばれる"雪人"の話。大自然への畏敬と愛情が滲む。

②約七、八千年の昔、熱帯アフリカのサバンナ地帯で始めて栽培種となった"ゴマ"は陸の路・海の路を通って東へ東へ、インドへ、中国へ、縄文期の日本へ。壮大なロマン。

③十七氏の個性とペーソスに満ちた体験的書斎論。(工学部教授)

――白岩 正

①竹本喜一・金岡喜久子『化学語源ものがたり』(化学同人)
②原田馨・日高人才『立体化学』(大日本図書)
③森浩一編『倭人の登場』(中央公論社)

①は、長い間、雑誌『化学』に連載されており、楽しみの一つであった。一冊の本にまとめられて読み返してみると、何気なく使用している試薬や器具に改めて愛着を覚える。「化学はどうも…」という人にも化学のロマンを読み取っていただける本である。②は、化学史に立脚した立体化学の入門書の試みとのことである。著者の方々の豊かな経験、学識、情熱を基にして記述された第一章の立体化学小史と各章末の歴史的エピソードには、深い感銘を受ける。また、低分子量化学物のみならず、高分子、生体物質の立体化学についても言及されている。③は、全集『日本の古代』の第一巻であり、現時点では第四巻まで刊行されている。歴史、考古、民族学など、関連諸学の協同のもとに、壮大な日本の古代が描き出されている。(工学部専任講師)

――神保 一郎

①福岡正夫『ゼミナール経済学入門』(日本経済新聞社)
②山崎昭『数理経済学の基礎』(創文社)
③Andreu Mas-Colell; **The Theory of General Economic Equilibrium-A Differentiable Approach** (Cambridge University Press)

①は経済学一般への入門書である。入門書を書く場合に難かしいのは、何を書かずにおくかであり、しかも全体が理論的整合性をもっていなければならない点である。この書物はインフレやマネタリズム、合理的期待と言ったマクロ経済学の重要課題は勿論の事、不動点定理による一般均衡の「解存在」の証明や「コア」の概念を使った市場構造の解明、線形のグラフを使った国際経済理論での「比較優位の原理」の説明など、簡単で明解に理論の最先端の一部を紹介している。マクロ経済学は華やかではあるが百家争鳴の感がある。ミクロは地味だが着実な進歩の跡が見られる。②はそのような方向への入門であり、測度論や微分トポロジーを使った新しい理論の説明である。③は最近の理論的発展を要領よく、まとめたものである。(経済学部教授)

――周防 節雄

①丸谷才一『桜もさよならも日本語』(新潮社)
②R・C・シャンク『考えるコンピュータ』(石崎俊訳、ダイヤモンド社)
③長尾真『機械翻訳はどこまで可能か』(岩波書店)

最近読んだ新刊書は沢山あることはあるのだが、ほとんどがコンピュータ、それもパソコンに関係のある本が多くて、ここで紹介するのは気がひける。本屋に入っても同じコーナーばかりウロウロする。古本屋にもよく出入りするが、そんな時は、新幹線の中の時間潰し用にと、文庫本の推理小説か、掘出し物の洋書のペーパーバックで少しエッチな小説なんかを手に入れる。こういう人間に、この一年に出た新刊書で、こうした真面目なコラムにふさわしい本を紹介しろとは、少々無理な注文というものだ。それでも、本棚を捜せばあるもので、ここに挙げた三冊なら、小生の品位を落とさずに済みそうだ。ああ、それでも結局は、ここに落ち着くんだな。三冊とも「言語」に関係のある本で、小生の好きなジャンルである。(経済学部専任講師)

――田中 充

①中村秀一郎・小池洋一編『中小企業のアジア向け投資』(アジア経済研究所)
②部落問題研究所編『部落問題事典』(解放出版社)
③木村尚三郎監修『集英社版・学習漫画 世界の歴史』(全16巻、集英社)

①中小企業の重要性は単に日本経済においてだけでなく、日本経済の国際化においても同様にますます高められてきている。つまり中小企業は、一国民経済のみならず国際経済社会の発展に大いなる地位・役割を占めているということを、最近二年間の精力的な共同研究をつうじて強調している。②部落問題を中核に据え、あらゆる差別や人権にかかわる事象を、歴史・運動・産業・労働・教育・福祉・保健・行政・文化・宗教・マスコミ等の側面について取り上げている。どの項目に目を通してみても、心底から人権問題に取り組まねばならないことがしみじみと理解されるであろう。③大学受験の手段として世界史を選んだ人、そうでない人、また教養を広めたい人にとって格好の書。(経済学部教授)

――[illegible]

①リュフィエ『生物学から文化へ3 — 人種と人種主義・未来』(河辺俊雄ほか訳、みすず書房)
②網野善彦『中世再考 — 列島の地域と社会』(日本エディタースクール出版部)
③樋渡宏一『性の源をさぐる — ゾウリムシの世界』(岩波新書)

①はヒトを生物進化の歴史の中に位置づけ、ヒトにおいて環境適応の過程が生物的特殊化から文化加速度的な進化が達成されたとする。しかし人種主義は、この文化的特殊化を生物的特殊化と取り違え、一定人種の文化を生物進化の頂点におくという誤りを犯す。②は日本の中世の歴史的現実に即し従来の歴史学における図式的理解に再考を迫る。それは西欧文化を基準にした「普遍的」発展図式を、特殊化の一傾向として相対化していくとすれば、①の方向に合致する。③は生物の性が遺伝的組みかえにより進化を有利に導き、また性的隔離により種の分化をもたらすという。後者の主張は、進化でなく多様な種の共存という①に欠落した視点を気づかせてくれる。(法学部助教授)

――永田 眞三郎

①長尾龍一・田中成明編『現代法哲学』(東京大学出版会)
②N・ルーマン『社会システム理論の視座』(佐藤勉訳、木鐸社)
③D・アテンボロー『地球の生きものたち』(日高敏隆ほか訳、早川書房)

①法理論、法思想、実定法の基礎理論の三巻からなる。現代法哲学の到達水準をふまえてその課題と状況を示すもの。解釈学からの方法論的な関心にも応えるもので、法を学ぶ者に一つの指針を与えてくれる。密度は高いが、専門外の者にも理解しやすい講座。②『社会構造とゼマンティーク』という二巻からなる著作の終章の翻訳。「いかにして社会秩序は可能か」というテーマのもとに、社会システム理論の歴史的背景をふまえて、その現代的な展望が語られている。③日本でも昨夏放映されたBBCのテレビ番組「地球に生きる」をもとに書かれたもの。生物たちがこの惑星のうえでどのように発展してきたかを描写する。著者のよってたつ進化論に与するか否かは別として、情緒的でも博物的でもなく、あくまで系統的に事態を把握しようとするその方法論には、教えられるところが多い。(法学部教授)

――中農 晶三

①田中阿里子『猪名の笹原かぜ吹けば』(講談社)
②山川浩二・中村昭雄編『映像100想』(電通)
③別冊太陽『フランス女優』(平凡社)

①同人誌の仲間である田中さんが、紫式部の娘賢子(かたこ)を書かれた。京都新聞に連載された小説である。作者の主題はいつも権力を背負った男のエゴと、女の悲愁…藤原道長の会話が怪物めいてすさまじい。題名は賢子作「百人一首」の歌で、下の句は「いでそよ人を忘れやはする」。

②テレビCMを発想するクリエーターたちの楽屋ばなし。おもしろいCMには必ず間があることからはじまって、彼らが間の連続である小津安二郎の映画から、影響を受けていることがわかる。つまり視聴覚のツボの大切さ。だが間の抜けたCMが多いのも事実だ。

③アナベラ、コリンヌ・リュシエール、フランソワーズ・アルヌールらの瞳と肢体、名場面がよみがえって、旧人類にはノスタルジア、新人類にはレトロ感覚。(社会学部教授)

――西岡 孝男

①R・P・ドーア『貿易摩擦の社会学—イギリスと日本—』(田丸延男訳、岩波新書)
②総合研究開発機構編『現代中国の経済システム』(筑摩書房)
③NHK取材班『森が危ない』(日本放送出版協会)

①名著『江戸時代の教育』などの日本研究で知られるドーア氏の人生観・社会観を表わす論文集。ここには日本を最も知る現代イギリスの知性の目がある。貿易摩擦の処方箋ではない。

②四人組が追放された中国で、農村において、ついで都市を重点とする経済体制改革が続けられている。社会主義経済体制の下で計画の機能を弱め市場機能を高めようとする現代中国経済を考える日中の研究者によるシンポジウムの報告と討論。小宮隆太郎氏の論文は注目されよう。

③北欧各国では、酸性雨で森林は枯死し、湖から魚が姿を消した。アジア、アフリカ、中南米の熱帯林は、焼き畑農業と放牧地への転換で急激に破壊されている。毎年、北海道と四国を合わせた面積の緑が地球から消えている。(工学部教授)

――野村 幸正

①槌田敦『エントロピーとエコロジー』(ダイヤモンド社)
②J・クリシュナムルティ『生の全体性』(大野純一・聖真一郎訳、平河出版社)
③松久朋琳・西岡常一・青山茂『木のこころ仏のこころ』(春秋社)

生命の出現は創発による。この生命体は、まず、大気と水と生物の循環によるエコロジカルな環境にあってはじめて生存しうる。①の著者は資源物理学者であり、彼はこの点をエントロピーから論じる。②は生存をわれわれ自身の心と精神に求めている。あるがままの自分をみつめること自体が変容の始まりである。自分自身の革命の必要性を説く。前半はインドの修行者である著者と精神科医、理論物理学者三者の対談であり、後半は著者の講話録である。③は、ある意味でこれら双方が見事に昇華した世界である。すぐれた技の仏師と宮大工の対談は、「木」の生命を通して日本の自然、風土、伝統そして心をみつめている。

この三冊は、生存のあり方を模索しているわれわれに何らかの示唆を与えてくれる。(文学部助教授)

――橋本 敬造

①カール・セーガン『サイエンス・アドベンチャー』(上・下巻、中村保男訳、新潮社)
②朝日新聞水戸支局編『デキゴトロジー ーNつくば博』(新潮社)
③堀源一郎『宇宙はどこまで広がっているか』(岩波書店)

ピュリッツァ賞受賞者カール・セーガンの『コスモス』が出たのが八〇年、テレビで放映されて高視聴率を獲得し、テレビでの科学番組の意味を全く変化させたが、太陽系の起源と進化のこの研究者の①は、二十一世紀に解かれるべき大宇宙の成りたち、原子構成のからくり、人間機能のメカニズムの謎をわかり易く論じたもの。③は、宇宙の概念の歴史と意味を説き、膨張する宇宙を論じ、さらに相対性理論によって宇宙の地平線を考察した。市民講座をまとめた本である。

科学技術時代といわれる現代を象徴させるべきイベントとして八五年に開催された科学博を、「意地悪」な記者の虫めがねで観察したのが②で、ハイテクの落し穴など短篇からなり、最後に筑波山神社が最先端技術神社に変わったというエピソードで結んでいる。(社会学部教授)

――平田 渡

①森銑三『随筆集 砧(きぬた)』(六興出版)
②マリオ・バルガス＝リョサ『パンタレオンと女たち』(高見英一訳、新潮社)
③ジョゼフ・ケッセル『ライオン』(多田智満子訳、白水社)

①は昨年亡くなった作者の未刊の小品随筆集。晩年の静かな通勤の様子を伝える「早起き」、涙香の雑文に感化を受けたという意外な事実を記す「五日間」、中でも諸先達や師事した井上通泰の姿を活写する「ゆでたまご」「三田村鳶魚翁の思出」「中村敬宇先生」「人物研究偶語」を通して、学問の道の何たるかを窺い知ることができる。姉妹編の『月夜車』(彌生書房)、続編の『木菟(みみづく)』(六興出版)も読みたい。

現代ラテンアメリカ文学の今年の収穫が②。ペルーのアマゾン地方で慰安婦部隊の編成に苦労する、生真面目な主人公の抱腹絶倒の物語。映画が公開され好評だったマヌエル・プイグ『蜘蛛女のキス』と共に忘れ難い。同じ翻訳小説で、③はケニアで野生のライオンを飼い馴らした白人少女の夢の破綻を、『昼顔』の作者が感動的に描いた作品である。(文学部助教授)

――三上 宏美

①交通権学会編『交通権』(日本経済評論社)
②ソ連科学アカデミー編『世界技術史』(金光不二夫ほか訳、大月書店)
③P・C・ヤシルド『洪水のあと』(山下泰文訳、岩波書店)

①は自分の専門分野からみて画期的なでき事=国鉄の民営化・分割を議会多数派が軽々と実行に移した事、この問題をより広い視点から考える手掛りを与えてくれる。国鉄問題を直接議論する本や論文はここ数年まことにおびただしい。どれも参考にはなるが視野が国鉄・鉄道に限られるものが多く、余り建設的でもない。本書は国民の生存権の一つとして交通権をフランスに学びながら打ち立てようとする。その中で鉄道のあり方も考察されている。車が使えなくなる日が来るかも知れない、と仮定して読むとよい。②は技術の発達を人類の歴史の中でとりあげ、今日の産業変化にも示唆に富む。残念ながら産業革命まで。が、大学はこういう本をじっくり読む所。③は長生きを欲するなら読むべし。難しい、高いと思うなら『最後の子どもたち』(小学館)を是非。(商学部助教授)

――三谷 真

①日経流通新聞編『「ヒット商品番付」大研究』(日本経済新聞社)
②日経産業新聞編『市場占有率(86年版)』(ネスコブックス)
③宮沢健一編『高度情報社会の流通機構』(東洋経済新報社)

どのような商品が作られ、どのように消費されているかを知ることは流通の分析に欠くことはできない。①は昭和四十六年から六十年までのいわゆる「ヒット商品」なるものの番付表であり、どんなものが売れてきたのかが一目でわかるようになっている。②は158種類の商品の市場占有率についての調査であり、各産業分野での企業の位置が示されている。①②とも読み物というよりは資料に近いものであるが、なかなかおもしろい。授業で学生に喋るための格好の材料ともなる。③の副題は「情報ネットワーク型流通システムの展開」。本来、流通とは物だけでなく情報の流通も当然含まれていたはずであるが、それをあえて取り上げなければならないところに情報社会といわれる今日の問題性があるのであろう。流通だけがとり残されるわけにはいかないのである。(商学部専任講師)

――元木 久

①中村隆英『昭和経済史』(岩波書店)
②宮崎義一『世界経済をどう見るか』(岩波新書)
③南亮進『どこへ行く中国経済』(日本評論社)

日本は世界最大の債権国になった。それは世界経済における円の強さに由来する。日本経済を除いて世界経済を論ずることができないのと同様に、世界経済を除いて日本経済を論ずることはできない。近年、オープン・マクロ経済学という名称が頻繁に用いられるようになったのはこれに関係する。

このような状況の中で日本を理解するためには、時間をたて軸に、空間を横軸にした面で思考する必要がある。この意味で、①はたて軸、②、③は横軸の代表と言えよう。いずれもデータを豊かに活用し、強い論理展開を極めて平易な文章で繰り拡げている。①によって日本経済が平坦な道を歩んできたのではないことを、②によって世界的絡みの中で日本経済の分析が必要なことを、③によって世界最大の人口を擁する中国を日本との比較の中で理解することができるであろう。(経済学部教授)

――矢野 章成

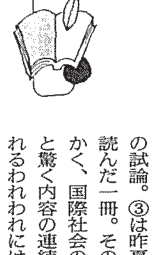
①溝口文雄『入門人工知能』(日経ハイテクシリーズ)
②大坪檀『改訂新版 技術者のための経営学』(講談社ブルーバックス)
③矢島鈞次『ユダヤ・プロトコール超裏読み術』(青春出版社プレイブックス)

①は「いま、なぜ、人工知能なのか」の解答。特別のシステムと協調する賢いコンピュータである。初心者はもとより、コンピュータ嫌いの者にも判り易い。『あいまい工学のすすめ』(寺野寿郎、ブルーバックス)と併読すれば、[illegible]的競争の激化、情報化、ハイテク化といった環境。人間生活に急速な変化を与えるイノベーション社会。この現実と未来社会に耐える新しい技術屋、事務屋像についての試論。③は昨夏、欧州滞在中に読んだ一冊。その真偽の程はともかく、国際社会の非情さに「あっ」と驚く内容の連続。国際化を迫られるわれわれには示唆豊か。(工学部教授)

――山川 雄巳

①スエトニウス『ローマ皇帝伝』(上・下巻、岩波文庫)
②京極純一『日本人と政治』(東京大学出版会)
③石田一良編『時代区分の思想』(ぺりかん社)

①は、紀元二世紀の初め、ハドリアヌス帝の文書係をしていたスエトニウス・トランクィルスが書いた、ユリウス・カエサルからドミティアヌスにいたる十一人のローマ皇帝の伝記集である。皇帝たちの生涯と生活のあらゆる細部にまで目くばりがゆきとどいていて、理屈抜きに面白く、かつ教訓にみちている。②は、政治学関係としては珍しくベストセラーとなった『日本の政治』の著者による、一九七〇年代以降の政治評論を一冊の本にまとめたもので、日本政治の変化の方向や問題点が、国際的な視野において的確に分析されている。③は、日本人が〈時代〉というものをどのように認識してきたかを、奈良時代から明治時代にいたるまでの代表的史書の分析をとおして明らかにしようとしたもので、この世紀末の歴史的位置を考えるうえでも参考となるであろう。(法学部教授)



――山中 敬一

①立花隆『脳死』(中央公論社)
②中野次雄編『判例とその読み方』(有斐閣)
③阿川尚之『アメリカン・ロイヤーの誕生』(中公新書)

一九六八年の札幌医大・和田教授による心臓移植手術の後、タブー視されていた心臓移植の再開に向けての動きが、近年、再び活発になっている。その前提として立ち塞がるのが、「脳死」是非論である。脳死の判定基準の明確化とともに、国民のコンセンサスを得ることも、その課題であるとされている。①は、膨大な資料と丹念な取材を通じてこの問題に迫ろうとしたもの。「脳死」とは何かをまず、正確に知ることが、その是非を論じる前提であろう。

法学を学ぶ者にとって、「判例」の意味はますます重くなってきている。②は、判例とは何か、実際に判例をどう読むかを五人の判事(経験者)が論じた好著。

今や、国際化ばやりである。外国人弁護士の日本での開業も問題になっているが、逆輸出もあってよい。③は、ソニーの社員のロースクール留学記。日本の法学教育や法学生の生活と比較するのもよし。(法学部教授)

――横田 茂

①S・ボールズ、D・M・ゴードン、T・E・ワイコフ『アメリカ衰退の経済学』(都留康・磯谷明徳訳、東洋経済新報社)
②新藤宗幸『アメリカ財政のパラダイム・政府間関係』(新曜社)
③足立巻一『学芸の大阪』(編集工房ノア)

①は一九八三年に刊行された Beyond the Waste Land: A Democratic Alternative to Economic Decline の翻訳である。アメリカのラディカル・エコノミストに属する著者達は、「戦後コーポレート・システム」というキーワードを軸に一九七〇年代のスタグフレーションを実証的に分析し、民主的経済成長政策の対案を示す。私がニューヨークに滞在した一九八四年、研究者の会合で本書の内容がよく話題になった。この本が現代アメリカ経済社会の「土台」の分析であるとすれば、②は政府間財政の構造を、連邦補助金の動態を軸として、くわしく分析している。③は著者の遺作集。品のよい文体で近世以後の大阪の学芸について語りかける。(商学部教授)

――鷲田 清一

①ジュリア・クリステヴァ『ポリローグ』(赤羽研三ほか訳、白水社)
②『TRAVERSE／1「化粧」』(リブロポート)
③Iain Chambers, URBAN RHYTHMS (Macmillan)

①西欧的な大文字の理性を、それが外部として排除してきたものの側へと、さらにはその彼方へと分散させ、複数化していく、現代哲学の最前線のスリリングな試みです。

②現代フランスの哲学者、美学者、文化人類学者、社会学者たちが、われわれ人間のメイク・アップ、コスメティックへの惑溺ぶりを思想的に解剖した論集。ポンピドゥ・センター発行の雑誌『トラヴェルス』の第一回目の翻訳です。

③ロラン・バルト的、あるいはベンヤミン的世界を背後にちらつかせながら、ロックンロールにはじまりポスト・パンクにいたる戦後のポップ音楽の展開を大衆文化の問題として論じたもの。一九八五年に刊行されたもので、大学前通りの古本屋で見つけました。懐しい写真、詳しいディスコグラフィーもついたすてきな本を手離してくれたひと、誰だか知らないけれど、ありがとう。(文学部助教授)

総合コース

科学・技術の進展と共に生活水準は高まり、高度なる分業社会が進んでいる。そのような現代社会にあって、人間は己れ自身を見失い、己れ自身が生きていることさえ忘れてしまいがちである。さらには自分自身の足許としての居住地域に対しても多くのことを見失っている。関西大学が立地している大阪についても同様のことがいえる。

宇宙時代、国際化時代、時代の流れとはいえかかる問題に対処する必要は認めるものの、己れ自身さらには己れの存在している足場を改めて見つめなおす必要が問われているのも現代社会なのである。

生命科学が進展してきているのも地方時代の到来が指摘されているのもかかる背景からのものと推察される。

今春表記のテーマで総合コースが開講される。まさにグッド・タイミングかと思われる。忙しい現代社会において、己れ自身の生命に想いをはせ、さらには母校関西大学が育くまれてきた地・大阪、「なにわ」に想いをはせていただきたい。(市川)

生命科学とは

「生きる」とは何か

生命科学以前を問い直す

――内山　勝利

一

発展めざましい現代科学の最先端において、「生命」という事象が急速にクローズ・アップされつつある。科学が生命の秘密を解き明かそうとしており、また生命事象を直接取りあつかうことによって、きわめて大きな科学的成果をあげていることには、だれしもおどろきを覚えざるを得ないであろう。

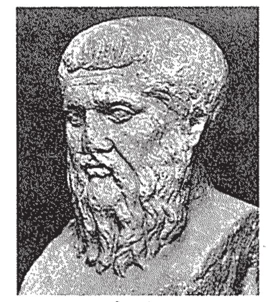
たとえば、DNAの発見を飛躍的な契機として遺伝子のメカニズムが物質過程として解明された今日では、生命は一連の化学構造式のかたちで記述され、それを「合成」することすら可能となっている。遺伝子の操作は、根本的には、自動車や電化製品の組み立てや部品交換と同じことであって、いささか安易な言い方であるにせよ、あたかも最新型の高画質テレビが開発されるのと同様の手順によって、最新型の生命体があいついで作り出されているのである。

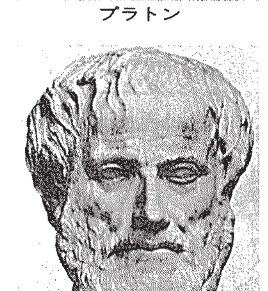
また、大規模集積回路(LSI)や超大規模集積回路(VLSI)をぎっしりつめこんで次々と登場してくるコンピュータは、加速度的な進歩をとげながら、文字どおり「人工頭脳」に限りなく近づこうとしている。「コンピュータは意識を持ちうるか」という問題は、いまや科学者や哲学者たちがまともに議論するにやぶさかでないテーマとなっているのである。

そうした個々の成果も驚嘆に価するものであるが、しかしむしろ現代の科学が生命そのものに目を向け、それを取りあつかうようになったという事実自体が、おそらく最大の驚異だと言わなければならないであろう。しばしば指摘されるように、近代科学は、まぎれもなくデカルト的な物・心二元論を根底において、精神活動や生命現象を意図的に排除することによって成立し、ニュートン的な機械論的物理学の理想を純化させつつ、そしてまさにそのことのゆえに、きわめて急速に効果的な発展をとげてきたものだからである。

とすれば、そうした近代科学の基本的性格を継承しているかぎりにおいて、現代の先端科学技術にとっても、「生命科学」とは一種の形容矛盾となりはしまいか。

生命そのものを物質的位相に還元することは、そうした矛盾を回避する一つの方途である。事実、今日の「生命科学」が、ややもすれば、生命の物質化に成立基盤を得ているように見える場合も少なくない。しかも、そのような場合にこそ、より大きな具体的成果がもたらされているようにも思われる。とはいえ、そのとき科学はほんとうに生命そのものに触れえているかどうか、そもそもほんとうの意味での「生命科学」は可能であるのかどうか。――こうした問題を視野におきつつ、筆者自身の担うべき課題としては、やや迂遠な地点から、いささか愚直な仕方で、本来「生命」とは何であるのか、「生きる」とはいかなることであるのかを、あらためて考え直してみることに努めたい。考察の手がかりを、主として古代ギリシアにおける哲学思想の展開のうちに求めることにする。そこには、問題の基本線がきわめて明確に描き出されているはずである。


プラトン


アリストテレス

デモクリトス

タレス

二

古代ギリシアにおいて「生命」概念を表わす最も主要な用語は「プシューケー」psycheであった。ふつう「魂」と訳されるこの言葉は、つねに「生命力」を含意しつつ、「魂・心・精神」などの広い意味範囲を担うものとして用いられている。それに対して「身体・物体」を意味する用語は「ソーマ」somaである。そしてその両者はちょうど今日における「身体と精神」あるいは「物質と生命」という対立の図式に相応するものとして、すでに古代ギリシア人によって明確な仕方で駆使されているのを見ることができる。あるいは、より正確に言いかえるならば、彼ら自身がこの対立の図式を明確化したうえで、事柄の含む最も本質的な側面を、鮮明に提出してみせているのである。

前六世紀前半の思想家タレスに始まる初期ギリシア哲学の展開は、一面において、まさにそうした問題の構図を明確化するプロセスであったと言うことができる。当初ミレトス派の人たちが万物は「水」(タレス)あるいは「無限なるもの」(アナクシマンドロス)あるいは「空気」(アナクシメネス)から成ると主張したとき、彼らの構想した「元のもの」archeとは、生命原理と物質原理とを未分化のままにともに内包している単一の実在であった。

しかし、やがて「実在」概念がより精緻につきつめられていくにつれて、彼らの立場にひそむあいまいさが鋭い批判にさらされる。そして当面、真の基礎的実在から生命原理の要因が捨象されて、存在とは物体(ソーマ)であるとする一義的な認定基準を洗練させてゆく。その方向線上において達成された最終的な帰結がレウキッポスとデモクリトスによる古代原子論(アトミズム)にほかならない。彼らによれば、魂もまた「最も微細なアトム」から構成されるのである。

プラトンにとっては、しかし、非物体的な魂(プシューケー)こそが真に原理たるにふさわしい存在であった。彼のこの主張は、いわゆるイデア論と分ちがたく連結していると同時に、自然像それ自体としても、アトミズム的解釈を、いわば物体次元における抽象画として、その原理的遡行の不徹底さを指弾する強力な議論たりえているのである。さらにまた、アリストテレスは、魂を「身体(質料)のもつ可能性の現実化(すなわちその形相的アスペクト)」と規定する独自の図式によって、プラトンとは異なった仕方で、アトミズムの超克を目指している。こうした観点から、これら三つの立場の拮抗関係を辿ることは、生命とは何かを深く見つめ直すための有力な手がかりを与えてくれるであろう。

(文学部助教授)

身近に接するバイオ産業

――矢木　秀治

最近、バイオ産業という言葉に頻繁に接する。バイオとは〈bio〉と書き、生命とか生物を意味する。バイオ産業はそれらを扱う産業である。日本には従来から醗酵工業とか製薬工業など、生物の機能を利用して食品、調味料、酒、医薬品など日常生活に深く関わる物質を生産している産業が存在していた。我家の台所をざっと見回しただけで写真にあるようなバイオ製品が出てきた。

ところが、最近、バイオ産業と呼ぶようになり、基盤となる学問をバイオテクノロジーと称するようになったのはなぜだろうか。それは、生命現象の解明が進み、微生物や動植物細胞に意識的に目的とする機能を付与する技術や生体機能の利用法に画期的な進歩が見られ、将来、それらを利用した産業が社会に大きく貢献する可能性が出てきたからである。

しかし、基礎科学の成果が直接日常生活に結び付くことは少なく、その成果を応用し、社会全体がその恩恵に浴することができるよう、安価で安全な製品を供給できる技術、すなわち、大量生産技術が確立し、社会的評価が得られて初めて身近に接するようになる。各種抗生物質の発見者の名前はよく耳にするが、実際に私達が利用できるまで生産量を上昇させた技術に目を向ける人は少ない。

大量生産技術といっても石油精製プラントや溶鉱炉のような巨大なものとは限らない。バイオ関連製品ではセンチメートル規模の装置で工業生産される場合もあれば、十メートルを越える装置が複数必要な場合もあり、多様である。これらの装置の設計、運転はソフト、ハード両面からの研究に支えられている。

生物の機能を利用して生産されたバイオ製品。我々の日常生活にも深いかかわりをもつようになった

バイオテクノロジーは「生命科学の成果を人類の幸福のために利用する学問」であるから、その中に生命とは何かとの思索があるはずである。生命そのものを単純に論じることはできなくても、生命現象の一部の機能を利用する知恵を人類は古くから身に付けていた。バイオテクノロジーは、いわば、生命科学の代謝産物と言える。

バイオテクノロジーの起源はパスツールの醗酵現象の解明であろう。その後、バイオ産業発展の鍵となった現象の解明と技術の開発としては、無菌化技術によって可能になった純粋培養法、通気かく拌技術の開発を必要とした深部培養法、微生物の代謝機構まで操作した代謝制御醗酵、固定化生体触媒を利用するバイオリアクター、新育種法、細胞培養などがある。これらの技術が開発されてから経過した年月はそれぞれ異なるが、いずれも現在のバイオ産業に欠くことのできないものばかりである。

ある目的製品を作り出すプロセスを実行するには(1)能力の高い微生物または動植物細胞を入手する、(2)バイオリアクターの性能を向上させる、(3)目的物質を効率よく回収する、といった技術が要求される。それぞれに分類される操作も多種多様で、その開発に従事する科学者、技術者の専門は広範囲に渡る。実験室規模では簡単であっても大型化が極めて困難な操作もある。さらに、これらに分類されている技術は互いに密接に関連を持っているので、ひとつの製品を作るのに多くの科学者や技術者の専門の境界を越えた協力が必要である。

従来バイオとはまったく関係がなかった企業も研究を開始している。文系、理系を問わず、学生諸君の多くが将来バイオ関連の仕事に従事するはずである。この講義をバイオ産業が社会に果たす役割を評価する際の参考にして頂きたい。

(工学部助教授)

新しく開講される

なにわ(きのう・きょう・あす)

―大阪商法と大阪文化―

「美・感・遊・創」の都なにわ

――守谷　基明

情報化の波の中で、わたくしたちは、過去、天下の台所を含んで、近年来その三つのキーワード「重厚長大」→「軽薄短小」→「美・感・遊・創」をマスメディアを通してインプットされると、ともすれば古きをすてて新しきにつこうとしがちである。こうした行動は正解であろうか。

その昔、天下の台所と、海と陸の道を結んで多くの人、物、金を出合わせ、内外の知恵と文化を集めたのは、始末・才覚・算用を旨とし、商いも自立・共存型の大阪町人であった。[illegible]近松、西鶴を、上方演芸の中に庶民文化を生み、懐徳堂、適塾の精神から[illegible]したこの都は、古くから商いと文化が結実した「美・感・遊・創」の都であった。だが、幕末、維新の大変革と東京遷都を境に、こうした大阪の[illegible]大阪の経済的地位の相対的低下、そして商いと文化の断絶が始まり、この傾向は戦中、戦後も続いたのである。

商いの方の復活は、近江、伊勢、京都、兵庫、北陸、甲州商人の船場などへの流入による混血型大阪商法ないし関西商法として現われてくる。

戦後、復興期を経て、大阪は重化学工業、コンビナート立地等の高度成長、いわゆる「重・厚・長・大」時代を迎えるが、他方、地盤沈下、環境汚染、資本の東京進出等によって、相対的地位は低下し、情報、文化産業の東京への流出傾向も著しい。オイルショック以降の省エネ、知識集約型の先端技術産業優位の、いわゆる「軽・薄・短・小」の時代には、大阪(圏)は産業転換が遅れ、府内総生産は東京(圏)はもとより全国平均を下回る低率成長に終始した。その大阪にも、消費者側の感性・個性化志向等、価値観の変化、韓国、台湾等からのキャッチアップ、これに対応する企業側の創造的技術・市場融合化、[illegible]によって経済成長・[illegible]れる、「美・感・遊・創」の時代が到来している。[illegible]流入者も含めて[illegible]創造に富んだかっての大阪商人の血がよみがえるなら、[illegible]に有利といえよう。[illegible]美・感・遊・創も国際化[illegible]今日にあっては、[illegible]軽・薄・短・小[illegible]ハイテク化の上に成[illegible]るし、これらとの[illegible]しての高付加価値[illegible]ければならない。

海外からの参加を得て賑わう'86御堂筋パレード(大阪21世紀協会提供)

大阪は本来、一、商いの都、二、水の都、三、笑いの都、四、食遊の都、五、進取の都、六、人情の都、七、文化・造形美の都、の七つの顔を持ち、老若男女すべてを魅了させる都だったはずである。この顔は是非、新旧とりまぜながら復元せねばならない。問題は、今後、他府県、諸外国から人・物・金をひきよせるだけのくつろげる都市としての吸引力・魅力の可能性が大阪にあるか、どうかである。大阪人が、すべて現代版大阪町人になりきり、商いの中に本物の情報・文化・レジャー・景観を徐々に取り戻していけば、それは可能であろう。

今年の十二月一日の「四全総」経過報告では、国際金融・情報中枢機能志向の東京圏対その他機能分担圏の図式にかかわるなど東京重視の姿勢が前面に出てきている。そして関西圏は文化、学術、研究の拠点を目指すだけとなっている。これでは関西新空港はともかく、周辺に先端技術産業群の大規模誘致がなく、大学移転も期待薄の関西学研都市は、ゴースト・タウン化するか、計画倒れとなる可能性すらある。

美・感・遊・創の関西圏の視点からは、西日本の中での大阪・関西、中枢機能分散・代替、副都心などの受皿の問題も併せ考えるとき、一つ大阪湾のど真ん中に人工島でもつくり、大阪ディズニーワールド、エアドーム、野外大フェスティバル広場、新空港との架橋ないしトンネル、等を建設し世界に誇るハイテク、ハイタッチの一大レジャーランドとし、あわせてフリー・トレード・ゾーンを設けるなどの、いわゆる超大型プロジェクトが必要であろう。

好きやねん大阪の熱気と、クリエーション・オオサカへの内外からの期待を肌で知るには、今秋十月十一日(日)予定の御堂筋パレードを是非、沿道の観衆の中からみられるとよい。百聞は一見にしかずである。昨秋九月二十八日(日)のパレードのテーマは、「世界につなごう!一九八六御堂筋パレード」、サブテーマは、「鳴らせ!二十一世紀へ友愛の鐘を」であった。わが関西大学吹奏楽部は関西学院大学と合同バンドで堂々の出場行進であった。

去年十一月二日わが関西大学は創立一〇〇周年を迎えた。これまで二〇万人有余の卒業生を世に送りつづけたことになる。校友の多くが大阪、関西で活躍されていることを関大人として大いに誇りにすべきである。

さて、総合コース「なにわ〈きのう・きょう・あす〉――大阪商法と大阪文化」は、文経社工の八教授によって法文社、経商工、第2部持ちまわりの各三回ごとの講義が昭和六十二、六十三両年度に行われる。各自の持ちテーマは、薗田香融教授(文)「関西大学と大阪文化」、肥田晧三教授(文)「近世なにわの庶民文化」、横田健一教授(文)「水の都としての大阪の歴史」、吉田永宏教授(文)「近代文学における大阪」、市川浩平教授(経)「大阪商法とマーケティング」、守谷基明教授(経)「大阪経済とクリエーション・オオサカ」、井上宏教授(社)「大阪の生活と笑い――上方演芸をめぐって――」、山田幸一教授(工)「大阪の近代建築――泉布観から大阪新市役所まで――」となっている。テーマ代表者は肥田晧三教授である。

このたびの総合コースは、昭和五十五、五十六両年度の「大阪論」の成果を一部ふまえ、上記八人が各分野から役割分担し、それぞれの研究成果を講義に投影してみようというものである。なお主テーマの冒頭語句が大阪でなく、「なにわ」としたのは、最初の都市「難波(なにわ)」、関大逍遥歌の一節「浪華」の都、「浪花」節、演歌「浪花」恋しぐれ、など歴史と文化の重みと、庶民性の意をこめてである。サブタイトルで「大阪」としたのは、現時点の「大阪」に足を着けて、きのう、きょう、あす、をみてみよう、という意と、八人共、好きやねん「大阪」の大合唱、の二つである。

オールスター・ゲームではないが、各担当者の熱のこもった三回読切りの全力投球が披露されよう。また興に乗れば芸人顔負けのしゃべくり、自称正調大阪弁でのトークも飛び出すかもしれない。もっとも受講生の入り次第ではあろう。御期待を乞う。きのう、きょう、あす、とはばたかんかな大阪、謳わんかな大阪。いま大阪は燃えてござる。諸君たちを待ちこがれているのである。

(経済学部教授)

商都笑都

―笑いが好きやねん―

――井上　宏

本学の在外研究員としてアメリカの中西部の街で暮らしたときであるが、そのアメリカで大阪を見たような気になっておかしく思ったことがある。

どこへ行っても感じのよいスマイルで迎えてくれて、初対面の印象が実によいのである。ジョークを好んで、よく笑わせるし、よく笑うのである。日常の買物で値切っても不愉快な顔をせず、ニコニコとしてまけてくれるし、何かとサービスがよいのである。私は大阪といっしょやいっしょやと思ったものであった。

大阪は、古くから「商都大阪」と言われてきたように、大阪と商いとはきってもきれない関係にある。当然のことながら、そこには商いを生活の基盤にして、「大阪文化」が成立、発展することとなった。商いを生活の基盤にするとどんなものの考え方や生活態度、価値観が育つのか、ここがおもしろい点なのである。

笑いの芸能を発展させる「うめだ花月劇場」

江戸時代から、明治、大正、昭和の歴史の中で大阪の顔も一様ではない。歴史の波の中でさまざまな変化をとげてきて、「地盤沈下」とか「文化不毛の街」とかなどと悪しざまに言われた時もあった。しかし、何と言われようとも大阪は大阪なのである。「商都大阪」が築いてきた本来の「大阪文化」を見失うようなことはしたくない。

私の関心は、その本来の「大阪文化」を明らかにし、見直す作業をしてみたいということである。

大阪という街は、発展の歴史からしても「武家文化」が支配した諸都市とは違い、全国的に見て他に類例のないユニークな街なのである。「大阪文化」は東京から見るとローカル文化ということになるわけだが、私には「大阪文化」は東京を越えて、インタナショナルな性格をもっているという気がしてならないのである。

「大阪論」が総合コースで誕生したのは昭和五十五年のことで、二年続けて終わり、今回の「大阪論」はそれから六年を経過しての開講ということになる。今でも思い出すが、五十五年の時、関西大学が、「大阪論」を開講するということは新聞紙上を賑わす"事件"ですらあった。一般の人々からも聴講ができないかとずいぶんの問い合わせもあった。履修者数も総合コースとしては記録的な数を示し、五十五年度で二、〇一一名、五十六年度三、四二七名という多きに達して、担当者達は目をむかんばかりに驚いたものであった。

あれから六年の間に、大阪の表情もずいぶんと変わった。大阪の文化を掘り起こし、大阪を活性化させんがためのさまざまなイベントや運動が次々と展開されている。そして今聞こえてくるのは、「大阪が好きやねん」という言葉である。アイラブオオサカということであるが、「好きやねん」という言葉が私は好きである。

「ねん」というのは大阪弁の末尾につく助詞だが、私は好きだとおもておりますが、おたくさんも好きとおもてるのと違いますやろかという、そんな響きがあるような気がするのである。

ともあれ、私達が「大阪論」をやりたいのは大阪が好きやからである。担当者の先生方は、大阪を語りだしたら時間がたつのを忘れてしまいそうな方々ばかりだ。

私は、「大阪文化」の中で、大阪の笑いを取りあげたいと思っている。どこの府県の人が一番よく笑うか、調査のデータはないが、私は大阪の人ではないだろうかと思っている。大阪の人はよく笑うし、人を笑わせるし、何よりも笑いが好きである。

笑いの芸能についてはどうか。江戸時代から連綿として受け継ぎ、今日もなお笑いの芸能を発展させている都市は大阪において他にない。テレビ時代の今日、東京から送られてくる番組が圧倒的に多い中で、大阪はお笑い番組を全国に供給できるのである。

大阪では笑いを抑制してこなかったし、笑いに対して寛大、よく笑わせてくれる人、おもしろい人は尊敬さえされる。客を迎えては、すがすがしいスマイルで、商談の時には冗談を折りまぜてお互いの緊張を解き、家庭の中では、誰かが洒落を言い、悪態をつき合いながらにぎやかに過ごす。

誰かが笑っていると、自分が笑われているとは思わず、何がおもしろいのん、私にも教えてときたがる。テレビやラジオで漫才や落語、コメディーがあると見たがるし、お笑いタレントが出ている番組だとつい見たくなってしまうし、時には演芸場やホールに笑いを求めて出かけ、ひとかどの"評論家"になってしまう。別段、お正月やお祭りでもない普段の日に、漫才や落語のレコードやテープをかけて笑いを楽しむ。

このような笑いの好きな大衆が広範に存在することで、笑いの芸能が生き続けることが出来ているわけである。

人間は、誰でもが笑う能力を持っている。個人によって笑う程度の違いはあれ、誰しもが日常生活の中で笑っている。この人間が本来的にもっている笑いの能力を開発し、よく生かしてきたのは大阪の人ではなかったろうか。つまり、大阪の商人が、日常の商いの中で、その生活の中で、笑いを積極的に開発してきたのであった。笑いの芸能は、そうした大阪人の生活を反映する形で、生活の中の笑いを結晶化させてくれている。

私の作業は芸能の中の笑いと生活の中の笑いとの相互関連を探ろうとするのであるが、その狙いは大阪の笑いが、陽気でおおらかで人間的、大阪を越えてインタナショナル、普遍的性格をもっているということを言いたいわけである。さて、何がとび出しますことやら……。

(社会学部教授)

ペンギン・ブック　ペリカン・ブックの紹介

図書館だより

総合図書館開架閲覧室にこのたび、新たにペンギン・ブック、ペリカン・ブックが排架されることとなった。いうまでもなくこの二つの叢書は、いわゆる「出版革命」を引き起こしたペーパーバックとして、全世界に知られているが、利用の手引きとして、その成立の事情や特徴など簡単に紹介してみよう。

ペンギン・ブックは文学・歴史・自然科学など、あらゆる分野を網羅する英語圏の代表的な叢書である。これは一九三五年、一人の独創的な出版人、アレン・レインによって、イギリスの地に誕生した。もちろん、それまでにもこのような叢書が全くなかったわけではない。例えば、ネルソン社の「新世紀図書」、グランド・リチャーズの「ワールド古典叢書」、コリンズの「ポケット古典叢書」、デント社の「エヴリマン叢書」などは早くから刊行を開始し、今なお多くの読書人に親しまれ、読みつがれている。しかし、これらはいずれも古典の再版に重点をおいており、その編集方針は主として、読者の知的教化をめざしたものであったため、一九三〇年代の広範な読者層の要望にこたえることは困難であった。このような背景のもとに、さまざまな種類の文芸を一般の読者に提供するために、わずか六ペンスという低価格でペンギン・ブックが登場したことは、まさに画期的な出来事であり、大衆から熱狂的な歓迎をうけ、たちまち大成功をおさめるに至った。そして、ペーパーバック運動の嚆矢（こうし）ともいうべきペンギン・ブックの出現は、やがて著者たちの経済状態を好転させ、書店の商取引の形式や外観さえも変えていったのである。

ペンギン・ブックは、まずはじめに十点の作品が一度に発売された。アガサ・クリスティの『スタイルズ荘の怪事件』、アンドレ・モーロワの『シェリー伝』、コンプトン・マッケンジの『カーニヴァル』、アーネスト・ヘミングウェイの『武器よさらば』、エリック・リンクレイターの『詩人のパブ』、スーザン・エルツの『マダム・クレア』などである。そして、この最初の選択基準が、以後この叢書の基本的な特徴を形成することになった。すなわち、真面目いっぽうでもなく、娯楽いっぽうでもない、ごく普通の教養人の趣味にかなった良書ということになろう。そしてこの編集方針は、現在に至るまで、原則として変わっていない。ただこの叢書の一部として、G・B・ハリソン編集のシェイクスピア劇六冊を刊行したことが、このような編集方針に多少の変化をもたらすことになったといえるかも知れない。というのは、これらイギリス文学の古典を刊行することは、昔からあった古典再版シリーズの伝統に逆戻りすることを意味したからである。そしてこのペンギン版シェイクスピアの刊行を契機として、その翌月から、これまでとは異なった新しい叢書の刊行が開始された。すなわち、ペリカン・ブックの誕生である。

ペリカン・シリーズは一九三七年五月に刊行が開始された。ペンギン・ブックがいわば読者を楽しませる良書であったのに対して、ペリカン・ブックは読者を啓蒙する教養書であった。またペンギンの殆どが再版ものであるのに対し、ペリカンは書下しがかなりの部分を占めていた。バーナード・ショウの『社会主義、資本主義、ソビエト主義への知的女性のための案内』、H・G・ウェルズの『世界史概観』、ジュリアン・ハックスリやサー・ジェイムス・ジーンズ、G・D・H・コール、レナード・ウーリーの著作、オルフ・スティプルドンの未来小説『最後と最初の人間』、G・E・マンウェアリングとボナミ・ドブレーの『浮ぶ共和国』、以上がペリカン・ブックとして選ばれた最初の作品である。

今回、排架されることとなった二つのペーパーバック・シリーズは合わせて約二、六〇〇冊、ペンギン・ブックは主に、「フィクション・ノンフィクション」シリーズが、ペリカン・ブックは既刊の殆どのものが含まれている。

排架場所は人文・社会系開架閲覧室の休憩室側、書架一面に並べられたペーパーバックは見事な景観である。これを機会に、是非一度ゆっくり手にとって見ていただきたいと願っている。

新しく排架された約2,600冊のペーパーバック

『石山退去録』を刊行

中世文学研究会が2年余かけて

織田信長は天下統一のため、要害の地大坂石山を手に入れようとして石山本願寺に軍勢を動かす。世に言う石山合戦がここに始まる。信長勢の攻撃に対し、石山方も勇敢に戦うが、ついには和睦、紀州へ退去する。

合戦譚が主であるが、その中に次のような霊異譚がさしはさまれる。

不シギナルカナ、七日メニ当ル六月二日ノ卯ノ刻ニ、不動明王ノ御ロヨリ刃ヲハキ出シ玉ヒ、其刃京都ノ方ヘ飛行ク。扨テコソ霊現新ナリ。何テモ信長ハ滅亡スル先表ナラント、取々ニ評義スル処ヘ、信長ハ明知ー―ガ謀叛ニ依テ、二日ノ朝天ニ切腹シタト。

江戸時代の写本で、略記、虫損、誤写があちこちに見られるが、苦心して読み解いた翻刻篇には、小見出しを付けるなど、通読の便がはかられている。

文学部（国文学）の青木晃教授を中心に、在学中その指導を受けた卒業生で教職にある者七名（内藤悦永、山脇秀介、福田ひとみ、山田茂、伴元子、太田満、藤本佳子）が関西大学中世文学研究会を結成。二年余にわたる研究と輪読を重ねて為上げたのが、この『龍谷大学図書館蔵　石山退去録』である。

緒言、影印篇、翻刻篇、解説（青木）、索引、年表、あとがき、から成る。B6版、二一八頁、和泉書院の「上方文庫4」に収められて二、八〇〇円。関西大学創立一〇〇周年に祝意をこめて十一月二日の刊。日本の文学、大阪の歴史に関心をもつ人々にとって待望の一書である。

講演会

◇…図書館

「21世紀へむけて変貌する英国の図書館」と題して、大英図書館顧問R・C・オルストン博士の講演会が十二月五日（金）、午後一時より三時三十分まで、図書館ホールにおいて開催された。博士は一九八三年に大英図書館所蔵『18世紀刊本書名目録』を完成、現在は19世紀英語出版物マイクロ・プロジェクトの総括責任者として活躍中である。高島義郎図書館長の挨拶に続いて、前半は一九七三年設立された大英図書館の歴史的背景を、後半はこのマイクロ・プロジェクトの重要性や収録範囲、さらにUTLAS、OCLCその他、各国データ・ベースを通して、オンライン検索も可能であることなど熱心に語られ、学内外多数の来聴者に深い感銘をあたえた。

公開座談会を開催

500人を超す聴衆で盛況

関西大学創立一〇〇周年を記念して、昨年十一月十四日、十五日の両日、午後一時三十分から、MIDシアター（大阪ビジネスパーク内）で公開座談会が開催された。

十四日（金）はNHK特集「大黄河」仏陀の道―黄河文明の深奥を探る―をテーマに、関西大学とNHK大阪放送局の主催、（財）大阪21世紀協会の後援で、大西昭男学長の開会挨拶で始まり、NHK「大黄河」取材班が撮影したビデオとスライドを使用して「大黄河―仏陀の道―を制作」と題してNHK大阪放送局BKスペシャル部副部長・後藤多聞氏の取材記に続き、東京大学東洋文化研究所教授・鎌田茂雄氏、大庭脩文学部教授、藤善真澄文学部教授による「仏陀の道を語る」と題して、仏教が黄河の滔々たる流れとともに東へ東へと伝わっていった歴史を中心に座談会が行われた。

十五日（土）はNHK特集「国宝への旅―受けつがれてきた国宝の美をさぐる―」をテーマに、関西大学とNHK大阪放送局、日本放送出版協会の主催、（財）大阪21世紀協会の後援で、NHK「国宝への旅」の加茂浄瑠璃寺、銀閣寺のビデオを使用して「番組制作と国宝」と題してNHK大阪放送局ディレクター・菊地正浩氏の取材記に続き、「写真にみる日本の美―大和路の春秋―」と題して写真家・入江泰吉氏ご自身が撮影されたスライドを使用して講演された。続いて、入江泰吉氏、薗田香融文学部教授、山岡泰造文学部教授による「美の魅力」と題して、国宝「加茂浄瑠璃寺」と「銀閣寺」を中心にその美の魅力について座談会が行われた。

聴衆は大阪はもとより、京都・奈良・兵庫からも多数の参加があり、会場のMIDシアターには両日とも五〇〇名を超す人々で満員となる盛況であった。

高槻市文化講座を開催

関西大学創立一〇〇周年を記念して、高槻市文化講座「大黄河」が、関西大学と高槻市教育委員会・NHK大阪放送局の主催で、昨年の十一月二十六日（水）から三回にわたって、高槻市市民会館三〇五号室でいずれも午後二時から開催された。

聴衆は地元の高槻市民で毎回、一六〇名を超す人々が各講師の講演を熱心に聞き入り、文化講座は盛況裏に終了した。

日程	テーマ	講師
11月26日（水）	黄河文明と日本	文学部教授　大庭　脩
12月3日（水）	黄河流域の自然と経済	文学部教授　河野　通博
12月10日（水）	黄河よもやま話	文学部教授　藤善　真澄

なお、講師とテーマは次のとおり。

BOOK 新刊紹介

『上方風雅信』
文学部教授　肥田晧三著
（人文書院・二三〇〇円）

著者にはすでに『露伴遺珠』、『近世子どもの絵本・上方篇』といったすぐれた編著があるが、上方のよき風韻をいまに伝える著者ならではの珠玉の力篇がようやく一本にまとめられ、博雅の士の渇をいやすこととなった。

初めての自著の公刊で、ふるさと大阪にみごと恩返しを果した著者自身の喜びはいかばかりかと思われる。著者の真髄が一堂に会して、その人と学問を知るにふさわしい快著が無事誕生したのを見ることは、ここに巧みに按配された諸篇はもちろん、著者の文業はもらさず切抜帳に貼って、ひそかに愛読してきた私などにとっても、実にうれしい出来事である。

著者の学風は、おのれの好奇心に忠実に物学びの奥義をきわめようとする真実の篤学者のそれであって、好事家的な旦那芸などでは決してないことをはっきりと読みとるべきである。上方芸能の歴史と実際に関する該博な知識、近世から近代にかけての大阪の学芸や文芸にたいする比類のない感受性と理解力、それらがたっぷりとした教養となって、読む者に静かな感動をあたえるのである。悠然と構えた格調のある文章には、ふしぎな力強さがこもっているのである。

想い出深い名品を通読してみて、改めて気づかされることであるが、私は、著者を同時代における最も大切な大阪人のひとりに数えて、はばからない。

（山野博史）

『生誕百年記念論文集　エズラ・パウンド研究』
大妻女子大学教授　福田陸太郎
文学部教授　安川　昱　編
（山口書店・三二〇〇円）

E・パウンドは近代詩壇のドン・キホーテ。無限の時空の一点を凝視し現れた未知の巨大な水車に勇躍立向かう。旧き水車はパウンド流に新しき生命を甦らせ、遅れて来た群れはそこに自らの詩郷を築く。然しその時にはサンチョ・パンザを伴れぬ孤独の騎士は次の聖杯求め荒野に流離（さすら）う。人は表出された壮大な記念碑（うた）の内に大胆且つ繊細な詩人の魂・意識の軌跡を辿りその創造の営みを探らねばならぬ。本書十六編の多彩な論文はその試みの一つであり、メイキン、安川両教授の二編は多彩さの両極を示す。

パウンド研究の権威メイキン博士は『Pound's Goddesses, Concreteness, Pantheism』でトルバドゥールに於ける女神の場合同様、彼を輝かしい具象詩人たらしめたのは、男を魅了し官能と忘却・酔生夢死の境に奔（はし）らす Circe であり、而も彼女の性の法悦は即解脱なる故に彼は彼女により共感覚的超肉体的ヴィジョンを創りあげた……と論を進める。周到なノートと共に一点一画を忽（ゆるがせ）にせぬ労作である。

安川教授の『エズラ・パウンドとストラヴィンスキー』は当然出会うべくして遂に会うことのなかった巨匠二人の対照的な晩年と死、葬儀を描きつつサン・ミケーレの墓地に隣り合って眠る各々の生きざまを浮彫りにする。教授の音楽への造詣と駆使する資料の豊かさが、快き充実感を齎（もたら）す好個のエッセイ。

（名取栄史）

『市場開放のために』
経済学部教授　山本繁緯著
（同文館出版・一八〇〇円）

かつて禁欲的な理論経済学者であった著者は本書によって現代経済学の正統派の理論を適用して現実の制度の矛盾を突き、あわせて大胆な社会改革を提示する啓蒙家に変身した。

本書で著者がもっとも力を入れて展開しているのは、第六章日本フリーゾーン構想である。そこでは、一、工業製品・農水産物を含めてすべての商品の関税率をゼロにする、二、残存輸入制限をすべて撤廃する、三、国家貿易品目を完全に自由化する、という政策を五年以内に段階的に実施することが提唱されている。

その結果は、農業が輸出産業化するという叶芳和の予測と、米の自給率が三割に落ちるという唯是康彦の予測が並記されている。しかしいずれの場合でも数十万単位で出現する専業農家、第一種兼業農家の失業に対する方策は、新地方都市の建設による第三次産業の雇用の拡大によって行えば良いとする。

破壊において鋭い著者の論理は建設においてにわかに鈍る。ヘクシャー＝オーリンの理論にもとづけば、産業調整も資本主義市場の働きにまかすべきであるからである。政府が何もしなくても失業は吸収される。そうではないか。

（鵜飼康東）

▶編集後記◀

関西大学一〇一年目第一号が本号である。本号においては一〇〇周年関連のものと今後一〇〇年の第一号として新たな息吹をふきこむべく編集方針で臨んだ。

昨年十一月の関西大学一〇〇周年の記念式典をはじめ記念行事を通して導かれてきた課題は一〇〇年の伝統をふまえ今後一〇〇年へ向かっていかに歩んでいくかということであった。そして、「人権の確立」「国際化」「情報化」といったテーマがこれからの関西大学の取組むべき課題であるという共通認識であったかと思われる。これらはいうまでもなく教職員・校友レベルのアプローチであって学部生・院生からのそれではないが、若きエネルギーに夢を托していると言えよう。

とまれ、年末のお忙しい中、本号のために玉稿をお寄せ頂いた方々に厚くお礼申し上げたい。

（市川・八亀）